ぶどうの木

第 20 号

八幡前田教会
基督伝導隊　大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言……榎本利三郎……1
信仰告白……上田喜美代……2
榎本　泉……2
緒方　三展……3
小田　信子……4
山口　琴江……5
洗礼を受けてから……金生　一郎……5
受洗の感謝……上田喜美代……8
朝の祝福……加藤　千代……9
我が思い出（二）……鈴木　一幹……12
友の死……久保田宮子……17
イエス様の出番です……大田　邦子……18
箴言丸号……緒方とみ子……26
いまにいたるこそ　主のめぐみなれ……津留崎浩行……28
私の手……伊規須泰子……29
思い立つ日が吉日……緒方とみ子……30
小鳥と猫……伊規須太郎……32
イエローカード……ぽけろうじん……35
感謝……池田　操……38
サイドブレーキ……小正路節美……41
主に導かれて……髙木ツルヱ……42
思い出のいと……うえの米子……44
かんしゃ……畠山　英子……46
道……光成　清子……49
みやまきりしま……伊規須泰子……51
感謝……緒方　昌隆……52
カナダからの感謝……鈴木　和子……53
正野姉を偲んで……池田　操……58
第一回目の入院中……E・R……59

巻頭言

榎本　利三郎

『わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである。』

（一・コリント　三・六―七）

今年（一九九三年）は、梅雨から続いて雨天がつゞき、大雨・台風による被害が多く、夏も冷夏と呼ばれ、気温も上がらない、涼しい夏であった。此のために農作物に悪影響を与え、米も不作、野菜も品不足、果物も味不足と言われて居ます。太陽の光、日射が植物の発育、成熟にどんなに大切なものであるか、しみじみと教えられます。

然し、此のぶどうの木は農夫である神様の豊かなめぐみの中で育まれ、今年も、巨峰・デラ・ベリーA・マスカット、……それぞれの慈味豊かな果実が結ばれました。それぞれ過熟・未熟・早熟・完熟とそれぞれの味わいある、香り高い果実です。どうぞそれぞれの霊の成長に応じて味わい、主に感謝致しましょう。

一九九三年一〇月一日

信仰告白

上田　喜美代

『彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。』（ヨハネ一・一二）

このみことばを与えられて早や三年が経ちました。信仰によって神の子とされましたが、主人の反対で、バプテスマを受ける事が出来ませんでした。が、ついに真実なる神様は私のお祈りに応えて下さり、主人のかたくなな心を開いて下さり、この度受洗させていただく事が出来る様に成りました。

たゞ感謝です。全てのわざには時があり神のなさる事は皆その時にかなって美しいとあります様に、生ける主が共に居て下さる事を体験出来ました事は感謝です。

「私達がまだ罪人であった時、イエス様が私のために死んで下さいました。この事実を忘れず、しっかり覚えられます様に、キリストの十字架にいつも新鮮なおどろきを持てます様に」と祈らずにはいられません。

四月二五日

信仰告白

榎本　泉

私は、社会人の一人として、東京の企業に勤めています。学生の頃の私は、友達と楽しく遊び、勉強して、人間関係の悩みなど一つも無く過ごしてきました。

社会人となって、現在四年目の私ですが、昨年の九月に、大変大切な人との別れがありました。

私の欠点が嫌になり、別れることになりました。でも私は納得できませんでした。誰でも欠点はあるはず、それを理解できないなんて、なんて器が小さいのかしらなどと、相手の事を責めてばかりいました。でも別れというものはやはり辛く、会社の中での親友にも、自分で気付かずに甘え、辛く当っていたのです。

よく母に、私は、『「金平糖（こんぺいとう）」の様だ。』と言われていましたが、指摘された事に腹を立て、自分の非を認めようとはしなかったのです。

ある時、親友の言った言葉を大変腹立たしく思い、友達の欠点を指摘したら、指摘返されました。友達からは初めて指摘され、友達の事を責める事ばかり考えていました。

自分は正しいものと思いたい者でした。あの人の良心はと見下げ、見下げることによって、自分の正しさを主張している。そして、自分の心のものさしで人の心を計り、自分を絶対基準とし、それより高い者をも、低い者をも、嘲笑する。私の傲慢さ、冷酷な心に気が付き、途方にくれ、死にたくもなりました。

これは神様を離れ自己中心な生活をした結果であり、これが、神様に対する大きな許されない罪でありました。

神様は、こんな許す事の出来ない恐ろしい罪を許すため、独り子であるイエス様を十字架にかけて、私の罪を罰して下さいました。昨年一〇月、このイエス様を私の救い主と信じさせていただきました。

「だれでも、キリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは、過ぎ去った。見よ、すべてが新しく成ったのである。」と神様が、私を全て新しくして下さいました。イエス様に、これからの生涯、お従いして行きたいと思います。

信仰告白

緒方三展

私は、神様を知る前は、何でも成せばなる、自分が一生懸命に頑張れば何でも出来る、何でも手に入るという気持ちでした。

幼い頃から、大きな挫折もなく生きてきたような気がします。しかし、すべての物を手にいれたけれど、心は全く満たされませんでした。その時母に、前田教会に行ってみなさいと言われ教会に通うようになりました。

そして、教会で、人間は皆、尊い神様と同じ形に型どって造っていただいている、すべての万物を支配していらっしゃる神様からの使命があるので神様に日々生かされているのだという事を、教えていただきました。

しかし、まだまだ自分の心の中では、自分ほど誠実な人間はいない、自分で生きているのなどと思っていましたが、神様からバプテスマを受ける機会を与えていただいた今、私は自分がいかに汚い、いやしい思いあがった人間であるかを教えていただきました。

このような私の罪を、イエス様の血によってあがなっていた

だいて、感謝でいっぱいです。

これからは、すべてを主にゆだねて、使命が終り御国に帰る日まで、信仰をもち、日々歩ませていただきたいと思います。

信仰告白

小田信子

クリスチャンの家庭に生まれ、小さい頃から教会に通っていた私は、はっきりとした信仰を持たないまま今まで歩んで来ました。何か問題にぶつかった時には熱心にはげむけれど、解決がつくとこのままでいけると考え、神様を離れてしまうという、御利益的な信仰でした。長い間この繰り返しでした。こんな自分で良いのだろうか、と問われた時、私は変わりたいと思いました。そして本当に信じたいと思いました。でも自分自身が熱心になればなるほど、内なる戦いが起きました。自分ではどうにもできないかたくなな心、神様を信じられなくなる時、信じようとしてもどうしても自分の心を動かすことはできませんでした。そんな状態を見るとあせり、失望し、行詰まってしまいました。そんな私に神様は、「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない。」と教えて下さいました。そしてそれは人間の意志や努力によるのではなく、ただ神のあわれみによることを教えられました。それから私は、「主を主と信じる信仰を与えて下さい」と祈ってきました。けれど自分の状態や結果を見ると、従うことはできませんでした。そんな時にも神様は、「信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである。」という聖言をもって、信じるとはどういうことかを教えて下さいました。いつの間にか自分が中心になって自分で変わろうとしていました。そのために自分で自分を苦しめ失望していました。今まで、状態や結果を見て信じようとし、頭で理解し納得して信じようという自分中心な考えや、自分中心な信仰でした。これは、神様から命を与えられ生かされていながら神様よりも自分で何かできる様な態度で、神様に対する恐ろしい罪でした。その罪のために私は長い間、みじめな者でした。イエス様は、私のこの罪のために十字架の上で命を捨てて、私の罪をあがなって、ゆるして下さったことを知りました。私は、悔い改めてイエス様を私の救い主と信じました。「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。」と、神様が私を潔めて、今、神の子としていただいたことを信じてバプテスマを受け、力強く生かしていただけることを感謝

します。

信仰告白

山口琴江

私は、神様の事を知りませんでした。昨年九月から体調をくずし、心身共に疲れて希望を失ってしまいました。

神様の御導きとでも言うのでしょうか、同じ職場の砥上さんが励ましてくれ、御両親に導かれて教会へ来ました。

何度か来ているうちに、神様の事、自分の事が、少しずつわかるようになりました。

私は神様から生命をいただいて生きてきたのに、神様に背を向けていた事が申し訳のない罪である事がわかりました。

その結果いろいろ苦しい生活を送りました。

昨年一二月二三日に、こんな罪深い私のために神様はひとり子イエス様を十字架にかけて私の罪を罰して下さった事を聞き、生命を捨てて愛して下さったイエス様を私の救い主と信じました。今も事情は変わっていませんが、罪許されて神様の子供としていただいて、心は喜びと平安でいっぱいです。

イエス様によって永遠の生命をいただいて、感謝で一日一日を過させていただいて居ます。

一九九三年九月五日

洗礼を受けてから

金生一郎

洗礼をうけてから、早いもので七年が経ちました。しかしこの七年を振り返ってみますと、本当に神様を信じてはいなかったように思います。形だけの信仰となり、体裁をととのえる信仰でありました。しかしこの前の鹿児島旅行は、私にとって神様を本当に信じること、そして神様の恵みに感謝することのすばらしいきっかけとなったように思います。そこでそのことについて、自分自身はっきりとさせていきたいと思います。

私が洗礼を受けるきっかけになった聖言は「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。」（エレミヤ三三・三）でした。これは私が高校三年の春に与えられた聖言です。ちょうどその頃は大学受験を控え、何か信じるものがほ

しいという気持ちと、クラスの友人からキリスト教のことについて聞かれ、もっとキリスト教のことについて知らなければならないという気持ちがあり、神様を信じられるようになりたいと思っていた時期でした。

この聖言が与えられるまでは、信じることができるようになれば、また神様が自分をそのように変えてくれたら信じようという気持ちでした。しかし自分の力で信じることができるようになるのではないということ、また自分で神様に対して「信じることができるようにしてくれたら信じる」、というように条件をつけて信じるものではないということをこの聖言によって教えられました。「私に必要なのは神様に呼び求めていくことである、そうすれば神様はこの聖言のように『大きな隠されていること』を示してくださって、自分でも信じることができるようにしてくれるはずである」。そう思い、その時には自分自身神様を信じているというはっきりとした確信はありませんでしたが、「神様を信じるようになりたい、そして信じていきますので信じさせて下さい」という思いで、洗礼を受けさせていただきました。

それからの年月、神様の恵みにより大学に入学、卒業し、就職してきました。自分の希望がかなえられ、「自分」という存在が徐々に大きくなってきていたように思います。確かに教会には時々休んではいましたが来ていたり、聖書もたまには読んだり、また何か問題にぶつかれば祈ったりしていました。しかしそれもすべてが自分の都合にあわせたものであって、事がうまくいってるときや他の用事があればそれを優先させていました。

会社に入り一年がたち、仕事や、また社会人としての生活にだんだんと慣れてきました。そこで自分自身大きく変わりたいと思い、昨年は年頭に「積極的に生きる」という目標をたてました。今まで人をみて失敗を恐れ、何もできずにいたことが多かったので、「今年（昨年）はこの点を変えていこう」と思い立てた目標でした。

そして昨年の夏、仕事の内容が大きく変わるなど、いろいろな変化が起こりました。いろいろと悩みましたが、年頭にたてた「積極的に生きる」という目標をもとに頑張り、そしてちょうど鹿児島旅行にいく頃には少しずつ余裕を感じられるようにまでなってきていました。

旅行中、友人と生駒高原をドライブしているとき、「金生もずいぶん変わってきたね」という話になりました。確かに、春に大学のゼミのＯＢで旅行に行った時は、一年間何もせずにいたため、周りの皆の成長に比べ、自分自身ひけめを感じていました。しかしこの数ヵ月間、自分でも頑張っていると思ってい

ましたし、また精神的にも少しずつしっかりしてきているように思いましたので、そう言われた時うれしく思い、このように変わってこれたことに対して「感謝だなあ」という気持ちが自然とでてきました。ちょうどその時、最初にあげたエレミヤ書の聖言がふいに思い浮かびました。最初はなぜこの聖言なのだろうと思い、考えてみました。すると、今まで神様を本心から信じていませんでしたが、そんな私を神様は見放さずに、それぞれ事の背後で導いてくださっていたことが教えられました。自分の変化に対して、導いてくださっていた神様の存在を素直に認め、感謝することができるようになりました。そして自分がはじめて神様を心から信じることができているように感じました。またこれが最初に与えられた聖言のとおり、私に対して「大きな隠されていること」を示されたものであり、神様の聖言は必ず実現されるという確信が与えられました。

翌日福岡に戻り、ちょうど火曜会がありましたので、早速教会に行き、残って和義先生と旅行の話をさせていただきました。感じたことを話していると、昨日気づいたこと以上に感謝することが、まるで湧き水のように次から次へとでてきました。文章にすると長くなるので、少し抜き出して箇条書きにすると、

○　自分自身が変わってきたこと、心に余裕ができたこと

○　感謝の祈りが自然とでてきたこと～いままでは祈ると

しても、何か困ったことがある時、その解決を求める祈りであったが、はじめて感謝の祈りをすることができたこと

○　教会に自然に来ることができること、説教を集中して聞けること

①　教会に九割出席するという目標を年頭にたてたこと～例年以上に出席している

②　①の目標を年頭に思い浮かべたこと

③　礼拝の日の駐車場整理をさせていただいていること～そのため、日曜日早く教会にいくようになり、礼拝に余裕をもって出ることができている

④　牧師館の改装を手伝わせていただいたこと～教会が身近に感じられるようになった

⑤　祖母の入院により週報、説教テープを用意するようになったこと～どこを読んだか、そしてどこがその週の聖言かを書き留めるようになった

○　洗礼を受けるときの気持ちを思い出せたこと

○　聖書を家でも開くようになったこと ……　等

以上、一部でありますが、考えれば考えるほど、次から次へと感謝の思いがでてきて、今まで神様に恵まれ続けてきていたことを示されました。

私の場合、神様の恵みに気づき、本当に神様を信じることができるようになるのに、六年半かかりました。しかし、受洗時に与えられた聖言がその通りになり、神様の聖言はすべて約束どおりになるということを教えられました。またこの聖言が自分に与えられたもの、自分の原点となる聖言であるという確信を持てるようになりました。

この期間、右往左往しましたが、すべてのことに時があるように、神様が私にとって一番いいときに現実のこととして下さったのであり、私には必要な期間だったのではないかと思います。そして、感謝することは次から次へと出てくるように、もう一度自分自身を見つめていけば、さらに見つかることを知り、またそれを言い表わすことで気づかなかった部分がどんどん明らかになり、そしてまた感謝できるということもあわせて教えられました。

今年に入ってからも、さらに恵まれ、今年の八月に献身させていただくこととなりました。これはまったく考えていなかったこと、それどころか考えにものぼらないことでありました。確かに信仰を持ちはじめたばかりで、動かされやすい自分ではあります。しかしそんな自分をも導いて下さっている神様を信じ、その神様に従って歩んでいきたいと思っております。

受洗の感謝

上田　喜美代

昨夜来のドシャぶりの雨も朝方には止み、先生方を初め沢山の兄弟姉妹の方々の祝福のうちに、念願のバプテスマを受けさせていただきありがとう感謝申し上げます。体は燃えて寒さは感じられませんでしたが、家に帰り着くとあれほど反対していた主人が、お風呂をたてて待っていてくれたのには胸が熱くなりました。人には、人の心を変える事は出来ませんが、主が私にも主人にも祝福をもって私の家庭を覆って下さいました事はなんと感謝な事でしょう。お風呂の中でとめどなく涙が出て胸が一杯でございました。イエス様もバプテスマを受けられると四〇日四〇夜、『荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである』とある様に、私も受洗の二日後には試練が待っていました。それは主人の兄嫁の脳腫瘍による死亡と主人の兄の癌の手術のため母を引取る事です。九四才の痴呆症では初め戸惑いがあり、毎朝やさしく仕える事が出来ます様にとお祈りをしていましたが、二〇日を過ぎる頃には、夕方になると己が出て、おばあちゃんを怒ってしまいます。自分の心が鬼の様になっている事に気づかされます。礼拝に出ている時、『一粒の麦が地に落ちて死

ななければ、それはたゞ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう。』（ヨハネ一二・二四―二五）のみ言葉を教えていただきました。自分で愛をなそうとするのでなく神に従う事である、神のみ旨を求める事である、自分の思いを捨て神に信頼し続ける事、自分の力では従い得ないからそばに居て下さるイエス様に目を注いで、「主よ感謝します」と信頼し、不安や悲しみを見つめる事を止める事ですと教えていただきました。

自分が今日あるのは神様の恵みの故、まして神の家族の一員としていただき、その上おばあちゃんと一緒に生活出来る事を感謝しています。おばあちゃんにやさしく出来る分、主人が私にやさしくしてくれます。初めの頃は自分で始末出来なかった用便も最近は上手に出来る様になり、主人がどうして良くなったかと不思議そうにしています。皆、神様のお恵みですね。

『あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試錬に会わせることはないばかりか、試錬と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。』（一・コリント一〇・一三）

『今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救に入るようになるためである。』（一・ペテロ二・一）

新しい生命を与えてくださいました御霊の灯を、何時も消すことのない様にと願っています。

一九九三年六月二七日

朝の祝福

加藤千代

私は昭和二九年二月一八日御救いに預かりました。忘れもしない、罪許したもうお優しいお優しいイエス様のお胸の中に救い上げられ、「あなた様にお従いします」、と申し上げたのでした。主日礼拝はいつも涙の中で、その都度私の中の汚れが洗い流されて行く思いでした。そして先生のお勧めで、毎朝六時からの早天祈祷会に出席させていただくようになりました。朝の清い空気の中を、後ろからサッサッと今の伊規須夫人―当時は東泰子姉とお兄様（今、八尾教会牧師）のお二人が軽く会釈されて追い越して行かれるのでした。そして先生はイザヤ書を良

く用いられて、

『女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子をあわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。』（イザヤ四九・一五）と愛し顧みて下さる神の焼けるような御愛を、いつもいつもこの心に銘記して下さいました。

けれどその年の九月二九日に八幡前田の桃園アパートから戸畑小沢見の社宅に転宅致してしまい、この素晴らしい朝ごとの恵みから離れなければなりませんでした。

戸畑の社宅は長屋ではありましたが部屋数が多くなりましたので、西宮の主人の両親と共に住む事になり、翌年昭和三〇年四月一〇日、紫川の上流で洗礼を授けていただきました。老父母が熱い紅茶を持って付き添って来てくれました。（母が白衣を縫ってくれまして）榎本先生は冷たい水の中に立ってお待ち下さり、私及び他の方々を（野村美恵子姉も御一緒だったとおもいます。）次々と清い水に浸して引き上げ、新しく産まれた者として下さいました。忘れられない感激の時でございました。

それから間もなくの事、次女の牧子が高熱を出し町医者にかかっておりますうち、ある日真っ赤なおしっこを致しました。おかわにそれを見ましたとき胸がつぶれるような驚きとこんなになるまで手を打たなかった迂闊さを悔い、牧子に済まなく思いました。腎臓炎で、急遽、製鉄病院に入院ということになりました。満三才でとりわけ小さなあの子が、完全看護で週一回の面会日を、小さな体でチョコンとベッドの上に座って待っているその姿がいじらしくて、毎朝あの子の為に祈ろうと思い立ちました。

家の中にも小さな庭にも祈る場所がありません。朝五時に起きて家を出、九州工大の笹藪を左にどんどん歩いて天籟寺小学校を右に尚どんどん歩いて行くと、一つの林にたどり着きました。その林の木の下に敷き物を敷きその上に座り祈りました。「主よ。あの子に母親として注意が足りませんでした。お詫びを致します。どうぞそのベッドの上に御慰めを与えたまえ。速やかな癒しを与えたまえ。」と。

だんだん朝が暗くなりました。工大の笹藪が終わり、天籟寺小学校にさしかかる所に来ますと真の闇、とても恐ろしゅうございました。でも気を取り直して

『たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。』（詩篇二三・四）

と申し上げますと、暗闇そのものがマントになって私をスッポリと包み、らくらくとそこを通り抜けさせていただいた事を思い出します。

ある朝、祈り終えて薄暗い道を帰りを急いでおりますと、後ろから小さな行列のようなものが近付いて来ます。小さな縦長のひつぎのような物を、前に三人、後ろに三人程の人が担いで、黙々とその薄くらやみの中、私の横を通り越して行きます。そのとき私は「主だ！」と覚えました。そのままそこにひざまずき、「主よ。私は先程あの林の中であなた様にお祈り申し上げたと思っておりましたが、ここにおいででございましたか！」、と申し上げると涙が溢れ流れて来て、「ああ主よ、あなたさまは涙と共でなくてはお仰ぎできないお方でいられます。」と申し上げ感動でしばらくそこから動けないでおりました。

またある朝は祈り終えて心も軽々と家路をいそいでおりますと、「ちょっと待ちなさい。あんたはこんなに早くどこへいってきたんね。手にもっているそれは何かね？」、と声がかかりました。私は座る為の敷物と聖書をもっていました。どうやらそれはおまわりさんのようでした。今までそんな事は一度もありませんでしたし、そんな所にそんな人がいたことも無かった。私がとまどっていると追っかけるように、「あんたは奥さんかね。旦那さんは？」、と聞いて来ます。私は今まで清い神の前で祈っていたのだ。何も咎められる事は無い。「主人は製鉄に勤めている加藤と言います」。私は胸を張って彼を見詰めて答えました。するとそのひとの目に恐れが走るのが分かりました。彼は目を伏せてもう何も言いませんでした。それで私はそのまま胸を張ってそこを立ち去りました。きっと主が彼を見詰められたのではないかと今も思っております。

またある朝、明けそめて来た薄明かりで詩篇を拝読していました。

『我が岩、わがあがないぬしなる主よ、どうか、私の口の言葉と、心の思いがあなたの前に喜ばれますように。』（詩篇一九・一四）

このみことばに至り、「ああ主よ。このことさえ守っておればもう大丈夫でございますね。」と、もうこれ以外に私の信仰生活で気を付けなくてはならない事は一つも無い、と思われて心晴れ晴れとそこを立ち上がった事を思い出します。

牧子はお恵みで、まる三ヵ月の後全治いたし退院することが出来、その後四四才になる今まで二子を授かっておりますが、腎臓病の気配も無い程の完治をいただいております。感謝でございます。

今七二才になりましたこの身に、主は六畳の一部屋を与えたまい、何の妨げも無く朝のデボーションの時を持たせていただいております。二階のこの南の窓の外は、大方一年以上、森のように青々と木木が茂り、春秋には様様の小鳥が珍しい鳴き声を聞かせにやって参ります。

あの戸畑の頃は、出掛けて行きます私を冷かしたりしておりました主人も、今は離れた部屋で朝毎に同じくデボーションの時を持たしていただいております。教会は朝毎の聖書の通読の箇所を定めて下さっておりますので、時々食事の時恵まれた箇所の交換を致します。こんな幸せな夫婦となして下さいました。こうして鈍く愚かな者も主の飽みたもうこと無き愛の御配慮の中でお育ていただいております。感謝尽きません。

我が思い出（二）

鈴木一幹

満州への出発二日前から、出発準備のため班内は急にあわただしくなりました。我々初年兵は全員胸部X線検査等の身体検査を受け、次に三種混合（コレラ・チフス・赤痢）の予防注射がありました。注射器を持った衛生兵が数人横に並んで居り、各自がそれぞれ一列に縦に並んで注射を受けます。

「鈴木二等兵」

「はい」

「一歩前に出て胸を出せ。」

「はい」

といって胸をつき出しました。注射器は静脈用の大形で、一人当り一CC位で、次から次と針をアルコールを含ませた綿花で拭き、一本で二〇人位は行っていたようです。胸に上から注射するので驚きましたが、腕にするより痛みはありませんでした。

それから満州行の服に着替えるため全員が被服庫前に集められ、今迄被っていた丸形の軍帽を戦斗帽に、下着から上衣、下衣（ズボン）等全部冬服の新品に交換され、靴も編上の短靴から新品の長靴「靴の踵に拍車（乗馬時に馬の腹部を蹴って走らせる時に使う歯車）の付いた靴」にそれぞれ交換しました。今まで着ていた継ぎはぎだらけのボロ服から新品のピカピカの服装となり、我ながら「カッコイイ」姿になりました。

荷物の整理や班内の清掃、食事の後かたずけ等は初年兵で行いますが、三度の食事の運搬や配膳は上等兵殿や一等兵殿が用意してくれるので、班内の初年兵はまるで、学生が修学旅行にでも行くようなはしゃぎようでした。

夕食後、人員点呼（班内の人員を調べ、顔色を見、服装を調べたりする。）の後、自分の所持品を整理していると、隣の席の戦友の後藤守二等兵が、

「鈴木さん、僕は今日の身体検査で胸部に異状があるとのこ

とで、明朝除隊させられることになった。先程徳田班長殿に呼ばれ、班長室で言い渡された。ほんとに残念だが明朝失礼するよ。君の家は行橋町とのことで、住所も見当が付いているので椎田町への帰りに行橋駅で途中下車し、お宅に立ち寄り、お母さんにお目にかゝり、君が元気で満州に行くことを伝えましょう。何かの縁で君とはからずも戦友となり、幸せだったと思う。君が班長殿より毎晩差し入れを受けたアンパンの味は一生忘れないよ。ほんとうに有難う。どうか元気でな。」と話した。私も「君とは何かのご縁で戦友となり、一緒に満州に行けると心強く思っていたが残念だなあ。帰ったら病院で精密検査を受けて養生し、また教壇に立ってほしい。軍人でなくても国へのご奉公は別にできるではないか。」と言ってはげまし、互いに固い握手を交して眠りについた。

翌日朝食後、後藤君は班内一同に挨拶をし、寂しそうな笑顔を見せて立去った。

（終戦、復員帰国後、椎田町に彼を尋ねたが、彼は除隊帰郷の翌年の秋に、肺結核で亡くなっていた。両親が佛壇の前で涙ながらに話しをされ「久留米の連隊で戦友になった貴方の話しをよくしていました。」とのことに感無量で返す言葉もありませんでした。）

午後一時となり、出発式のため、初年兵全員が営庭に集められ、久留米連隊長の中村大佐殿より次の挨拶があった。

「いよいよ諸君は本日夜〇時、当隊を出発し、満州国の関東軍に赴任することになった。部隊に到着配属後は軍務に精励し、国に忠節を尽してほしい。以下略」。

次に、関東軍から引率の為着任された輸送指揮官の村上大尉殿、山崎曹長殿ほか各班長になる下士官約八名の紹介があり、村上大尉殿より次の挨拶があった。「本官は満州第二二二部隊第二大隊長の村上である。今回部隊長の命により、貴様達の輸送指揮官として着任した。満州の我が隊まで貴様達を運ぶので、各自はただ今から担当班長の命に従うように。」

以上で式を終り、各班毎に新任班長の引率でそれぞれの内務班室に帰りました。我が班の班長は、やかましそうな山崎曹長でした。

夕食後、山崎班長殿より次のとおり出発に関しての諸注意があった。「本隊の満州までの移動は機密保持のため主として夜間を利用することになっている。輸送中は指示ある以外は勝手な行動や私語は一切禁止する。質問や用件がある者は山崎に申し出て指示を受けるように。万一これに反した者には規律違反として、容赦なくこれで叩き切るからそのつもりでおけ。」と腰に吊っていた軍刀を握った。

「次に、今貴様等が着ている服や、帽子、長靴は貴様達に支

給したものではない。赴任する部隊のものだ。内地から満州の部隊に運搬する手間をはぶくため、着せて運ぶのであるから、現地到着まで大切に取り扱い汚さぬように。」との諸注意の後、引続いて第二一二部隊の概略の説明があった。

「我が部隊は牡丹江省東寧県大城子と言う所で満州の最北端に位置し、その北側は黒龍江（現アムール河）が流れている。川幅は約一キロ米あり、その北側の岸から向うはソ連領である。すぐ対岸にソ連軍の戦車隊が布陣しているから、万一の場合は、我が砲兵隊は敵の戦車と戦うことになる。このことを今から肝に命じておくように。現地の部隊まで、釜山から列車で二日か三日位かゝると思う。

今度貴様達が到着した時は、部隊は丁度冬期演習でほとんど出払っているので、隊は空になっていると思う。これからは冬に向い次第に寒くなり、毎年の最低気温は零下四〇度位までに下がる。初年兵の中にはよく凍傷にかゝる者が出るが充分注意するように。冬の過し方等は到着後教えることにする。我が関東軍は日本一強い軍隊である。いや世界一強いと言ってもおかしくない。従って貴様等がその部隊の一員となるためには、関東軍法式で徹底的に鍛え、かわいがってやるので今から覚悟をしておけ。」

一同シーンとして聞いていた。

九時の消灯三〇分前となり、全員携行品の再点検をし、私は次の順序で雑のうに詰め込んだ。先づ母から貰った聖書と讃美歌を一番重いので底に入れ、千人針は腹に巻き、次に軍人勅諭に戦陣訓、便箋封筒、葉書、万年筆、五円が入っている財布、下着に洗面具、タオル、それに母が用意してくれた救急用小袋、これは中にメンソレータム、正露丸、包帯等が入っているもので、これ等をやっと詰め込んだ。少々重いが我慢することにした。救急袋を母が作ってくれたのは、私が今迄毎冬、手足に霜焼が出来ることと、腹をこわすことが多かったため、持って行くようにと作ってくれたものでした。

消灯ラッパが鳴り寝台にもぐったが、〇時迄には数時間しか無いことと、これで故郷や日本ともおさらばか、そんなことを思うと、いつまでも眼が冴え、母を始め祖父母の笑顔が浮び、行橋駅頭まで見送ってくれた親類の方や友人等の顔が次々に現われて、いつしか涙が顔を伝い、全く眠れませんでした。

〇時となり「起床」の号令で飛び起き、急ぎ軍装を整えて営庭に各班毎に整列しました。

点呼の後、村上大尉殿の「各班毎に出発」の号令で第一班から八班まで順々に出発した。営門には左右に久留米連隊の兵隊が整列し、見送りを受けたが、その中に、短期間ではあったが、お世話になった徳田班長殿はじめ、世話をいただいた古兵殿の

顔も見えた。「元気で頑張れよ!!」「風邪に気を付けてな!!」の声を背に聞きながら、各班毎に敬礼「頭右」「直れ」をして営門を後にした。

昼間とは違って、どの家も寝静まった久留米の街を靴音だけが、バリッ、バリッと響き、久留米駅目差して黙々として進みました。その内、入営前日に一泊した叔父の家の前を通ったが、勿論寝静まっていた。「叔父さん、叔母さん、どうかいつまでもお達者で」と心で祈りました。

久留米から乗り込んだ列車は客車でしたが窓はヨロイ戸がおろされ、開けてはならぬとの命令でした。

下関からは連絡船で釜山に向い、釜山からは列車で行くことになっていましたが、釜山駅のホームには未だ客車が到着していませんでした。反対のホームに貨物列車が八輌着いているのみでした。

その内、村上大尉殿より各班長に指示があり、山崎班長殿より「我々は今から反対ホームに着いている貨物列車に乗車するので付いて来い」、とのことで驚きながら付いて行きました。まるで荷物扱いでした。貨物車輌の床には藁筵が敷詰められ、ドアを閉めると真暗で、天囲中央に一〇ワットの電球が一個ぶら下がっているのみでした。トイレの代りにドラム缶の二つ切りが車輌の角に一個用意され、この一車輌に一個班五〇人がすし詰めとなりました。全員が座る（あぐらをかいて）と全く身動きできず、雑のうは肩からはずして各自膝に抱く始末でした。やがて夜になり、列車はガチャンと大きく数回揺れ、動き出しました。コトン、コトンとゆっくりした車輪の音で速度は遅く感じました。駅とおぼしきところに停車してもドアーは開けられず、私語も禁止されているので、何処の駅かも全く判らず、三時間位走ってやっと停車しドアーが開けられても、そこは人家の全く無い草原地帯等で、しかも約五分間の停車時間で出発の汽笛が鳴るので、この僅かな時間内に全員が蟻の這出るように列車から飛び下りて、大小の用達しをし、煙草を吸い終らねばならぬ有様でした。

また三度の食事は、人家の無い所に事前にトラックで運ばれた場所に列車が停車し、弁当を貰い、車内で食事をするわけですが、お茶は持ち込みできないので車外で先にお茶だけ飲み、弁当を食べる時はお茶なしでした。朝夕がそれぞれ、麦飯のおにぎり二個にタクワン少々と梅干、夕食のみ、おかず付の弁当でした。睡眠も横にはなれぬので座ったままの、うとうと眠りで、頭もぼんやり、おまけにお尻も痛み、一同くたくたの内に三日目の夕方（午後五時頃だったと思う）終点の東寧駅に到着しました。

東寧駅には馬を携えた兵隊達が一〇数人出迎えに来ていまし

た。持参していた馬は引率者の村上大尉殿や班長殿の乗馬でした。一同駅舎の前に整列し、ほっとする間もなく、部隊を目差して出発しました。東寧駅から大城子の部隊営門までは約五里（約二〇キロ米）あるとのことでした。

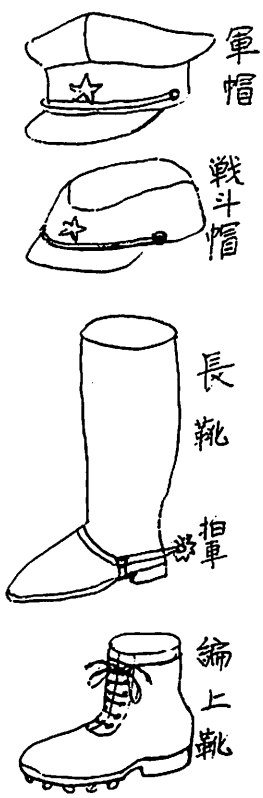
道路の沿線には処々に土で造られた満人の家が見え、家からは煙が上がっていて、夕食の用意をしているのだろうと思いましたが、人影は見えませんでした。一〇月も半ばを過ぎ、満州では草も枯れ茶色一色となり、無舗装の道路は北風に舞い上がる黄砂が横断し、眼が開けられぬ状況でした。

引率の山崎班長殿は部下の提供した馬に乗り、馬上から「早く歩け、このような歩き方では部隊につくのが明日の朝になってしまうぞ」と命じるので、皆は馬の早さに遅れまいと懸命に歩きますが、長靴をはいているので思うように足が上がらず、そのうち腹はへるし、喉は乾いて、生きた心地は無い有様でした。

久留米の隊で戦友だった後藤君の代りに戦友になった川上二等兵が隣りに並んで歩いていたが、月明りのせいか、非常に顔色が悪く見えた。「おい川上、大丈夫か」と言ったとたん、「鈴木さん、おれはもう歩けそうにない、先に行ってくれ」と、あえぎながら言った。「おい、もう少し頑張れ、もうかれこれ四時間位は歩いているので、五里は進んだと思う。隊も、もうすぐと思うので、おれの肩をにぎって歩け。」と言うと、「すまんなあ」と言って手を出してきたので、肩につかまらせ、片方の手を引張るようにして歩きました。雑のうの重みが肩に食い込み、疲れが絶頂に達したころ、山崎班長が馬上から「前方五〇〇米先に明りが見えるのが当隊だ。あと一息だ、皆頑張れ。」と号令した。午後九時過ぎ、やっと営門に到着した。班長の「歩調取れ」の号令で、皆は疲れた足ではあるが歩調をそろえ、門内に入った。後で約一〇数人が途中で倒れたとのことを聞きました。

その夜から満州関東軍での生活が始まりました。

（以下次号）



友の死

久保田　宮子

昨年の今頃、ＯＢ会をお世話させていただき、一番喜んでくれた友がこの世を去るとは誰が思った事でしょう。神様だけが知っていたのですね。牧師先生から、何時も生きるも死ぬるも神の手のうちと聞かされて居ましたが、全くその通りでした。信仰の弱い私ですが、最近特に神が生きて働いて下さる事実を見せていただき、感謝の日々を送らせていただいて居ます。

以前はそんなに親しい友ではありませんでしたが、四〇年振りのＯＢ会を連絡したら一番先に喜んで詳しいお手紙をいただき、その後電話や食事等で四〇年の空間を埋めました。その友が体の不調に気付いて半年後、癌で亡くなるとは!!

危篤の知らせを受け主人と一緒に飛んで行きましたが、目はしっかり私共を見つめていますけど言葉は出ませんでした。私は祈りました。「苦しみを取り去り天国に迎えて下さい」と。

三日後に六七才と言う若さで召されましたが、きっと今頃、最愛の御主人に会って色々とお話しをされている事と思います。

人柄でしょうか、それはそれはお通夜、告別式とも盛大でした。私は仏教の言葉がわからないので困りましたが、ただご遺族の上に豊かなお守りがあります様お祈りしました。

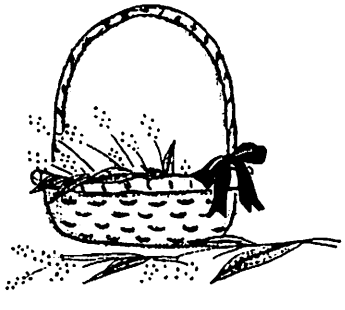
雨天の多い最近、私の宝箱より友の便りを開いて偲んで居ます。下手ですが又短歌を作りました。

一人居の住家に広すぎしも
　通夜の客あふれたるなり

一人居の友逝きたもう天国で
　夫と交り何を語らん

絶好の日より逝きし友は今
　多くの人の見送りうけて

ＯＢ会親しくなりし友は逝く
　多くの便り我に残して



イエス様の出番です

大田邦子

おばあさんの奮戦記　一

一二月一八日朝「年金病院で診察を受け、帰りに買い物をして昼までに帰るね、午後は盾の保護者会に出るので……」と元気に出かけた一美から、申し訳なさそうな声で電話、「ご免！即入院で帰れないの、身の回りの品は届けて貰いなさいって、そして来週手術の予定だからお願い！……を持って来て」と。

一週間前、急に眼がおかしい、曲がって見えると言い出し、直ちに眼科に出掛けました。その時皆で、ひょっとしたら入院になるかもよ、など軽い冗談を言って出掛け、診察検査の結果、通院になったので、一二月でもあるし、よかったねと感謝し祈って来たばかりでしたのに。

突然の宣言、帰宅は許されず、悪い症状に、来るべきものが来たという感じで、先ず、イエス様、すべてに知恵と力を与えて下さいと祈りました。

「汝我に呼び求めよ、我汝に応えん。又汝が知らざる大いなることと、隠れたることとを汝に示さん」

の聖言を与えられました。いよいよ私の出番と、身の引き締まるのを覚えました。

我が家の家事の大黒柱が急に姿を消した今、一美の病気のこと、年末に向け俄か主婦業のことなど、一瞬不安が頭をよぎります。でも全てをご存じのイエス様が共にいて下さいます。そして、

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちかよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。」

と呼びかけて下さいました。早速午後は、盾の保護者会です。主人が行くことになりました。ところが主人は学校とは無縁の人、娘の時でさえ行ったことはありません。それが、孫の中学の保護者面談、どんなことになるのか、何が飛び出すかわかりません。でもそんなことを言っておられません。真面目に話してくれるよう切に祈って学校に連絡、盾と校門で待ち合わせ、後は盾のリードでやって貰うことにしました。

私は入院準備をしてとりあえず病院に。その前に榎本先生に電話させていただき、まず入院の経過をお話しして、お祈りをお願いしますと申し上げましたところ、聖言をいただきました。

「大能のみ手の下に己を低くせよ、時至らば、神汝を高くし給わん」

主がかえりみていて下さいますからと、お励ましと力を与えていただきました。私もこのことは、主が全てを許し愛するが故

に、この中を通して下さることを謙虚に受け止め、そして私が、「先生、いよいよ私の出番です」と、自分に言い聞かせる様に、しっかりと申しましたら、間髪を入れず、

「いいえ、あなたの出番ではありません、イエス様の出番です」と温和なお諭し。たった今まで、自分なりに、主により頼んで歩み始めたつもりだっただけに——。脳天をガーンとぶたれたようなショックでした。後は何をお話しさせていただいたかよく覚えていません。

謙虚に受止め、全て主のみ手にお委ねしますと口に言いながらこの有様、自分の思い上がりが本当に恥ずかしくなりました。

イエス様ご免なさい、主の前に跪いて悔い改め、立ち返らせていただきました。初めての厳しい経験のスタートに、こうして新しくされて本当に感謝でした。

力を与えていただいて病院に行きました。病院では、一美もどんなにかシュンとしているかと思いましたが、思ったより明るい表情に主の憐れみを感謝しました。

今日は降って湧いたような出来事の一日でした。夕べには、一日の勤めを終えて、マリア様の祈り「私は主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように」と、家族が心を一つにして主の前に祈ることの出来ました幸いを感謝しました。

イエス様有難うございました。

おばあさんの奮戦記　二

翌日からは、一美の入院生活、年末年始の準備、何よりも家族五人、特に男四人の食生活、健康管理と重い責任が肩にのしかかって来ます。特に、一番祈りの課題だった崖淵に立たされている二浪の斉の受験、中二で難しい時期の盾、主人は仕事柄一年で一番多忙な時です。

さあ始まりです。何しろ家事のバトンタッチも全然ないまま大黒柱が急に姿を消したものですから、どこに何があるやら、ウロウロまごまごでしたが、知恵と力を与えていただき、次第に軌道に乗ってきます。

今まで、一緒に生活しておりましたものの、直接台所を担当して新たに目を見張ることです。私にとっては、食欲旺盛な孫を入れ五人の賄いは生まれて初めて、でも作ったおかずは気持ちのいい程片付けてくれます。五キロのお米が三日もちません。幸いこの年になって、若い者の食事作りの出来ますことを心から感謝しました。

平成四年もいよいよ残すところ僅かです。一美の病状もだんだん複雑な様相を呈しはじめ、どうやら入院も長引くとのこと、それだけに新年聖会が待ち望まれます。一美も、年末よりお正月三日までの外泊許可で帰宅、久し振りに全員そろっての感謝の一刻でした。

平成五年元旦、心を新たにして教会に出掛け、ベンチに座ってまず見上げた講壇のメッセージが目に飛び込んで来ました。

「見よ、わたしは主である。私に呼び求めよ。私の愛のうちにいなさい。」

何と力ある聖言、そして懇ろな主の呼びかけ、今の私にピッタリ。様々な問題の中で、イエス様が私にご自身を知らせようとしていらっしゃると、身近に主のご愛を覚えました。

聖会で榎本先生が、「見よ私は主である、全て命ある者の神である、私に出来ない事があろうか」と。例外なしにどんなことでも新しくして下さる、信仰は状態の先を行くのが信仰で、「祈りて願うことはすでに得たりと信ぜよ、さらば得べし」、状態が悪ければ悪い程、その時こそ神様らしい業を行って下さることを信じて待ちなさいと教えられ、アーメンと感謝しました。

つい、状態、感情、結果に捕われやすい私です。悔い改め、私には今は恵みの時、今は救いの日であると信じさせていただき、新しくされ、力を与えられて、いよいよ新年のスタートです。

おばあさんの奮戦記　三

三日、信仰を持って一美を病院に送り出しました。いよいよ、斉の決戦の時が近づき、予備校通いも早朝から夜遅くまで、朝の弱い私も家族に助けられ、五時過ぎ起床、それぞれお弁当を持たせて送り出します。盾も部活で夕方遅く疲れ切って帰って来ます。夜は一一時、一二時の就寝、生活のリズムも崩れてきます。

サタンも姿を変え様々な問題をおいて襲ってきます。とうとう、目に見える状態に振り回され、あれだけ恵まれた新年聖会の信仰もどこへやら、心が主から離れ、醜いところ丸出しとなります。主人や、斉や盾も、日頃の鬱積したものを晴らすかのように、（これでも信仰をと願っている者の姿でしょうか）けんけんごうごうと、とことんやったこともありました。

でも、イエス様はすべてお見通し、このような者をも恵もうとして、じっと耐えて見ていて下さいました。そして益として下さいました。今まで気づきませんでしたが、孫達との間の見えない壁が取り除かれ、距離感もなくなり、言い争いも、後は笑い草として語り合えるなど、思いがけないさわやかな会話の戻って来た時の快よさと共に、孫との交わりの中で、私自身、主とのお交わりを様々な形で教えていただきました。

すべてが初めての経験、ぶつかる問題も皆新た、主の恵みも新た、毎日が戦いと発見の連続です。まさしく、日々新たに、本当に感謝の日々です。そして只ひたすら、主の憐れみを祈る日々でした。

二月に入って、一美の二回目、三回目の手術が予定されています。斉の発表も近づいて来ました。いよいよ「イエス様の出番です」。今度は全てお委ねして、結果はどうであろうと、「見よ私は主である。私に呼び求めよ。私の愛のうちにいなさい。」と聖言に支えられ祈って待ちました。

お蔭様で、榎本先生ご夫妻をはじめ、皆様方のお祈りに応えられ、斉も主の憐れみで、願っていました大学に合格させていただき、時が時だけに闇の中に大きな光を与えられました。そしてイエス様が、この通り私が共にいるから大丈夫だよとみ声をかけていただき、一美の闘病生活にも、家族の者にも、大いなる力とならせていただきました。

イエス様、道を開いていただいて有難うございました。

おばあさんの奮戦記　四

学校が決まり色々準備の為、一美に一泊の外泊許可で帰って貰い、相談の結果、出来るだけ早い中に、相模原に下宿探しに私が行くことになりました。(斉もおばあさんとでは可愛想ですが、仕方ありません)

この時、主のなされるみ業に襟を正しました。それは斉の行くことになったK大学、その敷地内にあるK大学病院は、なんと八年前、相模原に住んでました兄がぼうこうガンで入院していた病院なのです。ガンが進み末期となった頃、突然私が、目の不自由な姉に代わって看病することになり、これも主のご用として、毎日病院の兄のもとに食事を作って運んだ所なのです。

それも丁度一月から二月まで寒さの厳しい時でした。もう化学療法も限界に来たので、自然療法をと転院することになり、大学病院を去る時、もうここには二度と来ることはないだろうと、悲しい、辛い思い出を残しながら、病院続きのK大学キャンパスを感傷的に踏みしめながら歩いて去ったことが、はっきりと昨日のことの様に思い出されます。広い全国の中からよりによって、かつて私のこんな厳しい思い出のある大学を斉が選び入学させていただくとは……。正に神様のなされるみ業という以外に!。

八年前、毎日通った同じ道を通って斉の下宿探しです。全く知らない所と違い、土地感があるので動き易く何より感謝でした。

今は亡き兄夫婦の相模原のマンションは、伊豆下田に住む姪と甥が、両親の思い出多い家だし、場所がいいからと手放さずにいました。そして、「叔母さん、上京の折には何時でもゆっくり使ってね」と、鍵を預けてくれていました。だから、斉の受験の時も何の心配もなく、ここを拠点に動くことが出来ました。

この年になって、孫の下宿探しに行くなど夢にも思いません。辛く悲しかった兄の看病の折も、弱い私でしたが、常に共にいまして支え導いて、御用を全うさせていただきました主の遠大な御計画には言葉もございません。

「汝我に呼び求めよ、我汝に応えん。又汝が知らざる大いなる事と、隠れたる事とを汝に示さん」

聖言を具体化して、生ける神にふれさせていただきました。イエス様、有難うございました。感謝し讃美させていただきます。

おばあさんの奮戦記　五

一美の三回目の手術が二月二五日と決まり、その前にというので、一七、一八日上京を決めました。下田の姪に相模原の家を使わせて貰いたいと電話連絡しました。

その時姪は、

「この際骨休みにすこしゆっくりしたら」と親切に…。

「有難う、でも今度はそれどころではないのよ」

「おばさん、鍵持ってるね」

「ええ、持ってるわよ、じゃお世話になるわね」

と、承諾を得、これで宿はOK、感謝しました。

二月一四日　聖日礼拝、

「わたしの子よ、あなたはキリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい」

主の一方的なご愛を示され、今一度新たに心の備えをしていただきました。一美の手術の為にも、下宿探しの為にも、気を引き締めて切に祈りました。

さあ準備と、張り切らなければと思いますが、ところが、なんとなく身体がだるく、体調も頭の回転も今一つです。どうも風邪らしい。留守の間の食事、買い物など、あれこれ思うように捗りません。

でも、家族に助けられ、殊に斉の助っ人ぶりは頼もしく、ここまで成長させていただいた主の憐れみを感謝しました。夜になると節々が痛み、熱も七度四分、不安がよぎります。イエス様、み心を教えて下さい、止められるのでしょうか。私が駄目なら、主人か信夫さんに。その時、風を見て恐れたペテロを思い起こさせていただき、

「信仰の薄い者よ」とイエス様のお声。

「見よ、わたしは主である、……わたしに出来ないことがあろうか」

と、信仰を持たせていただきました。

いよいよ前日になりました。目を覚ますとまだ微熱があり、

出発準備は山積、時間はどんどん過ぎて行きます。身体は思うにまかせず、イライラしてとうとう頭がパニック状態に陥ってしまいました。

そこで、気づかせていただきました。力がないのに、全て自分が出番とやり出すもので、イエス様から再び、「信仰の薄い者よ、お前に何が出来ようか、出番が違うよ」と、又諭されます。

思い切って病院行きを決心、幸い火曜日、冬野先生の診察日、電話して三時過ぎ病院に飛び込みました。

先生に「助けて下さい、どうしても明日上京しなければならないので…」と申しましたら、先生「私は助けてあげられません、点滴ならしてあげられます」とニコッと笑われます。一瞬、アレッ、この先生、牧師でもないのに…、しまった、又失敗!。

「……よみがえったイエス・キリストをいつも思っていなさい」……。もう人を頼みとしている自分、イエス様ご免なさい。

そして、一時間ベッドに横たわることになるのですが、その時、ああ時間が惜しいと頭をかすめます。「まだこりないのか」とイエス様のお叱り。主が恵もうとしていらっしゃるのに、本当に往生際の悪いことです。やっとここで、自分の思いを捨て、主におゆだねする情けない有様です。

もう準備はほどほどにと決め、全てを離れ、み手のうちに静まることが出来ました。この一時間は素晴らしい恵みの時でした。

「見よ、わたしは主である。わたしに呼び求めよ。わたしの愛のうちにいなさい。」と懇ろに語りかけ新たにしていただき、何物にも代え難い主とのお交わりの一時間でした。

点滴を終え、有難うございましたとベッドから立ち上がると、身体も心もすっきり、先程のパニック状態がウソのように、本当に嬉しくなりました。「大能のみ手のもとに、己を低うせよ……」。自分の計画を捨て主に依り頼んだ時、このような者をも顧みて、み業を行って下さいました。もう全てが感謝で、心から主を崇めさせていただきました。

おばあさんの奮戦記　六

二月一七日、予定通り、少々の風邪はなんのその、主が支えて下さいます。早朝、斉と出発させていただきました。

新幹線の車中で、斉と上京後の打ち合わせをすませ、やっとホット一息、新大阪を過ぎた頃、フト鍵は?ない!、入れ忘れたのに気がつきました。さあ大変!。胸の動悸が激しくなります。どうしよう、取りに帰るわけにはいかない。新幹線のスピードがやたらと恨めしくなります。先日姪に連絡した時、

「鍵を持ってるね」と聞かれ、

「あるわよ」と返事し、もうそれで安心、鍵のことはすっかり頭から離れてしまっていました。イエス様、お助け下さい、「私に出来ないことがあろうか」とおっしゃるイエス様に、斉と心を合わせて祈りました。

まず、留守番の主人に電話、下田にいる姪に連絡を取って貰うことにし、一旦電話を切り、その間に斉と、「ひょっとしたら、研ちゃん（甥）が東京に出ているかも、そうしたら鍵を持っているものね」と一縷の望みを以て待ちます。

恐る恐る又八幡に電話します。何と、イエス様はちゃんとご承知、道を備えて下さいました。甥は下田にいて、姪が二日前にアメリカに出発、その途中で相模原に立ち寄り、家の工事がまだ残っていたので、管理人さんに後を頼み、鍵を預けてあったのです。

そして、主人に甥からの電話で、「おばさん達の年齢、人相、大学入学のことなど、しっかり管理人さんに伝えておいたから貰って、大丈夫心配しなさんな」との親切な言づけです。

ワー良かったねと、斉と二人で感謝しました。

これで安心、予定通り、下宿を何軒か下見して帰ろうと、まず下宿探しに直行しました。

案外時間がかかり、途中食事をすませ、マンションに帰りついた時は七時半過ぎ、やれやれと、集会所の階下にある管理人室を尋ねると、もう戸が締められ真っ暗、ここでも、シマッタ！又失敗です。家を目の前にして入れない、時間を確認して貰っておくべきであったと、口惜しいけれど後の祭りです。

寒くはあるし、ドッと疲れが出て来ます。もうここから街に出て宿を捜すのは大変、斉とどうしよう、イエス様お助け下さいと祈りました。

集会所のドアを押すと開くではありませんか。奥の方の部屋で人の声がします。よく聞くと、どうもバレエのレッスンがあっている様子、そっと上がって行って、タイミングを見て、勇気を出して、大声で呼びかけて見ました。

トウシューズ姿の、スマートな先生が出て来られ、

「もう管理人さんは帰られました、五時までですよ」と素っ気ない返事。じゃあ管理人さんの家を尋ねて行くより仕方がない、もう一押しと、勇気を出して事情を話しました。

「それなら今晩八時過ぎに、もう一度集会所に見えますから、待たれますか」

思わず、「ハイ、有難うございました、お邪魔してすみませんでした」と声もはずみます。ああ助かった、と二人で深々と頭を下げ、イエス様、有難うございましたと、感謝々々です。寒さも疲れもどこへやら、二〇分程待ちました。

やがて、年老いた人の良さそうな管理人さんが見え、開口一

番

「お待ちしていました。下田の幸田さんから、三時頃見えるとおっしゃったのに、どうされたのかと…。丁度鍵を預かっていたから良かったですね、預かってなかったら、どんなに頼まれても開けてあげることは出来ませんでしたよ、九州からだそうですね、運が良かったですね」と。

手渡された鍵、イエス様の温かいみ手から渡された思い、もう言葉がありませんでした。

鍵を開け部屋に入り、跪ずいて二人で感謝を捧げました、その夜は主の限りないご愛にどっぷりと浸り、み翼の陰にゆっくりと休ませていただき、翌日は恙なく用事を済ませ、無事に帰幡することが出来ました。

恵みを心にとめて

榎本先生ご夫妻をはじめ、皆様のお祈りに支えられ、一美も無事に手術を終えることが出来、三月九日に退院させていただきました。

この時、長い間の祈りの課題でした家族全員揃っての「家拝」を思い立ったのです。

「今という時を生かして用いなさい」の聖言に力を与えられ、思い切っての提案、そして明日からと思いましたが、ペテロが、「すぐに」網を捨ててお従いしたように、今晩、食後八時頃から一五分位ということで。(主人は時間が悪いと云ってゴネましたが、翌日から素直に加わってくれました)

それぞれが一日の勤めを終え、夕べに家族六人がテーブルを囲み、主の前に静まり、共に祈り、聖書に親しませていただける姿に、イエス様の真実なお取扱いを見せていただき、胸が熱くなるのを覚えました。

これまでの様々な出来事を通し、しみじみと自分が生きているのではなく、み手のうちに生かされていることを強く知らせていただきました。

一美の眼の状態を見る時、肉の思いでは胸の痛むことしばしばですが、

「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。」

アーメンと感謝致します。

今も主にあって、望みを持たせていただき祈っております。

約三ヶ月の間でしたが、まず素晴らしいスタート、「あなたではありません、イエス様の出番です」から始まり、これでもか、これでもかと失敗だらけの私でしたが、この様な者をも顧みて、愛するが故にと主の訓練のもと、み業を示し育んでいただきました主の豊かなお恵みと御祝福、そして家族で共に主を

喜ぶことの出来ますこと、言い尽くすことの出来ない感謝で一杯でございます。

「主を喜ぶことはあなた方の力です」

蔭に在って、榎本先生はじめ、皆様方のお祈りと、温かいお励ましを心から感謝申し上げます。有難うございました。

「大能のみ手のもとに己を低うせよ、時至らば汝を高うし給わん」

主のみ名を崇めて感謝致します。

箴言丸号（ゲン）

緒方　とみ子

僕は、北野緒方犬舎で、一九九二年一〇月七日の昼過ぎに誕生しました。犬舎近くには北野町の名所ともいわれる「コスモス街道」があり、僕達が生まれた日も、この祭りで賑わっていた。特に、町長が一〇月から「北野町の環境をよくする条例」を施行し、随分ゴミ問題で話題となり、新聞やテレビニュースでも取り上げられ、遠方からの御客様も年々増える一方だった。だから僕達が生まれる前は、この時を記念として「秋桜」と言う名前を付けたいと祈っていたらしいが、結局、「ソロモン王の様に、悟りと知恵ある子に育つように」と名前が変えられたのは、「箴言」という神様の言葉を聞いて教えられたそうです。

『うそ、偽りをわたしから遠ざけ、貧しくもなく、また富みもせず、ただなくてならぬ食物で私を養ってください。』

（箴言　三〇・八）

それに、僕が一番はやくカナ母さんより泣き声を教えられ、神様より言葉を貰ったと言う事で、「しんげんまるごう（通称ゲン）」と名付けられました。兄や妹達と比べると、僕が一番大きく目立ちたがり屋（これは飼い主似）で騒がしい子犬だそうです。僕の上には二匹の兄がいますが、すぐ上の兄は、「神様の恵みなくして、どうして五匹もの子犬が与えられるだろうか」と感謝して「恵龍丸号（メグ）」といい、僕と違って随分おとなしくのんびりした性格です。その後に生まれた「真起姫号（マキ）」は、僕に続いて大きく育っていて、カナ母さんの（吉ノ真沙号）とマル父さんの（龍起丸号）の名前を貰ったそうです。末牝の「真実姫号（マミ）」は、戸畑教会の礼拝で教えられた「真実を守ろうと戦う聖徒の祈り」から名付けました。最後に生まれたせいか体重も軽く小柄ですが、顔は父犬のマル似です。緒方夫婦は心配して、母犬のおっぱいに吸い付かせようと努力していますが、わりと要領のよい末っ子マミは、いつ

も乳の良く出る場所に陣取っています。その時が負けられずに、競い合いうるさいのが僕で、跳ね除けられているのが、一番上の兄の「友成号（ナル）」です。カナ母さん（六六番）と同じ賛美歌三一二番より名付けられたそうですが、残念ながら兄さんと前後に生まれたらしい犬は、すでに死んでいたそうです。僕達は、その日の満潮に生まれると言います。だから、午前一一時三〇分から午後三時三三分迄の間に、六匹も誕生するなんて思っても見なかったそうです。奥さんは、主人に頼んでパートに出掛け留守で、カナ母さんが破水した時、その主人はオロオロするばかりで、奥さんに電話ばかりしていたそうです。おまけに、奥さんから、迎えに来て持ち場を離れたと言って怒られ、ついに僕達の事で口げんかしたそうです。なにしろ始めての経験で、二人ともおっかなかったそうですが、袋の中で僕の様に、大きな声で産声を上げているのもいれば、泣かない子もいて、それから積極的に手伝うようになった様です。陣痛は三〇～四〇分おきに来て、袋と臍の緒（糸で結ぶ）を切り、後産の始末をすること数回。奥さんは、ヘトヘトになったそうですが、ご主人は僕達を心から歓迎してくれました。神様、僕達に命を下さって本当に有り難うございました。

＊一〇月一四日　（生後一週間目の記録より）

牝犬を飼い始めたきっかけは、私に「娘が与えられない」と、いやがらせをしたのが始まりで、しかし私も犬好きだったのが幸して、二人で娘の様に可愛がりました。狭い団地では、本当に好きでないと煙たがられますけれど、神様の守りの中で、団地の犬好きの方々と仲良しになったりして、恵まれています。おまけに、牡犬のいる北九吉川犬舎に繋がる方々にもよくしていただき、ベテラン夫婦にならって、カナ親子を育てたいと祈っています。ナル（六〇〇g）、メグ（五〇〇g）、ゲン（八〇〇g）、マキ（五〇〇g）、マミ（三〇〇g）と大きくなっていますが、カナ母さん（二二kg）は益々細くなっています。

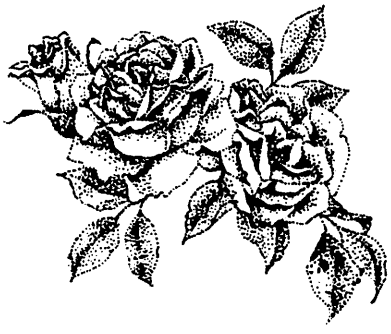
＊一〇月二五日　「第四九回福岡県支部展（いこいの森井手二号公園）」にて初めて、秋田犬の秋季展覧会に行きました。私達も犬を見る目が違ってきたのか、あの犬はあそこが良いとか悪いなどと、他人が一生懸命育てた犬を批判しました。その帰り道に、吉川犬舎一行（七人）が我家に来て、子犬を見てもらいました結果、マキとメグを育てる事になりました。そうなれば私の仕事が増えるので、主人がこれからは犬の為に頑張って働くそうです。（神様の為にとなるのは何時の日か？）祈る可し、祈る可し。

＊一〇月二八日　生後三週間目（一〇年日記抄）

子犬がだんだん大きくなってきて、見分けが付くようになってきたので、名前で呼ぶ様にしました。それにしても、カナ母

さんの面倒見の良いのは、関心します。ニュースなどでは、母親が自分で始末して、ゴミ袋に入れて捨てたり、数年間に渡って押し入れに隠していたりして、子供を殺していた事件もありましたが、本当にあの甘えていたカナは、今しっかりと母親になっています。四〇日頃になると、子犬の目も見えるそうですが、もうすでに個性的です。それにこの頃から、虫下しやワクチン注射など、病気対策が始まります。勿論、一胎子犬登録申請書（血統書に繋がる）も出さねばなりませんから、お金もかかります。

私は、犬を育てて初めて、親に感謝しています。父はすでに昇天していますが、一五才から嫁ぐまで一緒に生活した義理母は、今日で七・七忌になりました。本当に、皆様より祈っていただきましたが、痛み（肺ガン）も消えて、天国に帰りました。感謝です。



いまにいたるこそ　主のめぐみなれ

津留崎　浩　行

いまにいたるこそ　主のめぐみなれ
まもりのみてをば　などうたがふべき
いかなるおりにも　あいなるかみは
すべてのことをば　よきになしたまふ

霊感賦二六番のこの歌を、家拝の折によく讃美させていただきます。とくにこの一番の歌詞を一行ずつ味わいながら、本当に神様はひと足ひと足を守り、最善の道を開いてくださったなあ、と感謝いたしております。

人生は誰しも楽しいことばかりではありません。時には真っ暗と思われる中を歩むこともあります。私もその様な経験をしたことがあります。然し、その中で主を仰ぎ望んだとき、主が確かな手で守り、道を開いてくださったことを、此の歌詞の一行一行と共に思い浮べ、心から主に感謝させていただきます。

『苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを　学ぶことができました。』

（詩篇一一九・七一）

『あなたは善にして善を行われます。』（詩篇一一九・六八）

此の詩篇の聖言にも、苦しみを通してこそ、愛なる主を知ることができると教えてあります。

さまざまな中を通って、甦りの主が今も力と愛の御手で、私を最善に導いてくださる方であることを知ったのです。

いかなるおりにも　あいなるかみは
すべてのことをば　よきになしたまふ

何が起こっても、そこに慰め主がいてくださって、天からの平安と喜びを与えてくださる、そのことを知る程幸いなことはありません。

霊感賦二六番を、アーメン！ハレルヤ！と讃美させていただいております。

私の手

伊規須　泰子

◆オルガンを弾く
私の手は絶えず音を間違える
頭と手が繋がって
頭が間違って指令を出しているのだ
もっとゆっくり気をつけて弾かなければ
助けて下さいイエス様
◆ワープロを打つ（叩くようにして打つ）
ローマ字で打つ
近頃頭が鈍って来たのかな
私の手は又々絶えず間違える
ローマ字で
　ＫＩＲＩＳＵＴＯと打つと
　キリストと出る。
ひょいと間違えると
　キリＳＩＴＵ？？？となってしまう
◆私の手はどうなっているのだ
絶えず間違っている

助けて下さいイエス様！
◆ゆっくり注意して打とう
祈りながら
頭と手、不思議なものだな
神様のみわざ！

思い立つ日が吉日

緒方　とみ子

＊父子家庭の悲劇

「オーイ、オーイ」。これは、主人がいつも私を呼ぶ声です。私は山びこではありません。「父から素敵な名前をすでにいただいている者です」と、何度言ってもダメなのです。寝ても覚めても、近くにいても呼ばれますし、それに食事を取る回数の多い事！いくら私が子の年でも、これでは疲れが溜って大変だと思い、私はある事を実行したいと祈りました。それは戸畑教会の集会に出掛ける事です。それも、主人が居ない時を利用して出掛けます（まるで家出）。そうでもしないと、眼圧も下がらず私の病気（心の渇きも）は治りません。しかし、本当に痔の痛みで苦しかったのでしょう。（スパイスのきいたカレーライスを食べて）チャンスが与えられ、息子の協力もあり、出掛ける日が決まりました。どうしてこのような事をするのかと言う一番の理由は、主人が息子を頼りにして離れないからです。暗い夜道を一人でモクモクと走る運転手という職業柄、とても忍耐していますから、その反動で誰かに甘えたいと言う気持は分かりますが、新人類の息子を頼りにしているのです。自分が親にしてきたからと言って、見返りを求めます。お互いに苦しい事を話しますと、息子は分かってくれましたが主人はダメですので、私はショック療法も必要だと思いました。それに、結婚生活も安定して落ち着いて来て居ますので、ここら辺でカツを入れなくてはなりません。主人もクリスチャンになり、問題がない訳では有りません。むしろ、お互いに神様を前にしての生活ですから、厳しくもあり楽しくもあります。頼りにして欲しい方は違うのだと言いますが、今まで息子に頼っていますから、なかなか習慣が取れないのでしょう。かといってこのままでは、私のきつい気性が治まりません。自分はどうなのかと問われたら、神様の前でいい子ぶるばかりでしょう。

七月二四日（金）早朝五時三〇分起床（主人と会わない様に祈りながら、早めに起きた）。午前六時三五分北野発（甘木電車に乗り）、六時四九分に久留米駅着。ＪＲ久留米七時三〇分

発、九時二二分に九州工大前に着き、そこから歩いて戸畑教会の金曜集会（午前一〇時〜）に集う。神様より癒していただき感謝しました。集会後、伊規須先生と語らいました。そして、午後一時から戸畑病院入院中の、義母の見舞いに出掛けました。（一時間余り居まして、母の世話をしてくれている方がおられる幸町に行きましたが、残念ながら留守でした）。今日一泊させていただく事になっている友達（洋裁の先輩）は、なにをするにしても自発的で、最近はスイミングスクールに行っています。友達の性格は私とよく似ていて、はっきりものを言いますから誤解され易いのですが、私達は長く交際しています。彼女のお母さんも兄弟もクリスチャンだそうで、彼女だけは洗礼を受けていないそうです。どうして反発したのか私もはっきり聞いた事がないままです。昨日電話して、「明日、泊めて下さい。どこで待ちあえば良いかしら……小倉駅モノレール午後六時二〇分」。本当に感謝致しました。だって、私も、実家はもうないのと同じです。

七月二五日（土）午前九時一〇分。友達の団地より、彼女は仕事（裁断師）へ。その時もう一人の友達と偶然に会い、小倉駅前よりバスで一緒に戸畑まで（残念ながら、教会の掃除に間に合わなかった）。それから、戸畑の姪の千津香さんの家に居ました。彼女は、小学生から大学生までずっと、お姉さんの真弓さんと一緒です。おまけに、就職も、病院こそ違いますが、病理検査科という所に勤めています。私がクリスチャンになり、彼女達と付き合うようになって、どのように影響したかは分かりませんが、主のみわざが訪れる様にと祈っています。夕方になり（午後四時から五時頃まで）榎本先生宅を訪問しました。今でも、先生夫妻から教えられた事を記憶しています。祈るべし。

七月二六日（日）（主日礼拝は午前一〇時〜）

姪のいる二階で、いつものように午前五時に目をさます（主人の食事タイムです）。ウトウトしていて気がついたら、下で義姉が食事の用意をしてくれている。感謝していただきました。待ちのぞんでいた礼拝です。礼拝前に、小さな一枚の紙片をもらいました。それには、『カナ（犬）の生理が始まったので連絡してほしい。まさたか』、と書かれてありましたが、私はかたくなな心で、電話を家に着くまでしませんでした。なにしろ、私は悪い事をしている訳ではない。むしろ霊的には神様から喜ばれている者だからと、天狗になって居ました。しかし悔しいけれど、帰る家がすでに北野になっていますから、これからJR線で帰らなくてはなりません。しかし、本当にこのスケジュールは楽しい事ばかりでした。もうこのような事は出来ません。なぜなら、うちの可愛い娘のカナが大人になり、これから交配

準備にかかりますから、忙しくなるのが目にみえているからです。そして、私が祈って思い切ってした事が、息子の独立に繋がったのですから、本当に神様は祈りを聞かれていると確信いたしました。

＊耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者のほかだれも知らない新しい名がかいてある。

（黙示録二・一七）礼拝の聖言

小鳥と猫

伊規須　太郎

『汝は労を加えず、育てざる、この一夜に生じて一夜に滅びし瓢（ひさご）を惜しめり。まして十二万余の右左を弁（わきま）えざる者とあまたの家畜とあるこの大いなる町ニネベをわれ惜しまざらんや』（ヨナ四・一〇―一一）

◆戸畑教会の駐車場は、普通車なら四台入ります。正面入り口の南側に、狭くて高いブロック塀があります。八段積んでありますから、高さは一六〇センチです。ブロックの穴には鉄筋とモルタルが詰めてありますが、詰まっていない穴が一つあります。その中に小鳥が巣を作りました。これはあとから分かった事です。小鳥は「シジュウカラ（？）」でした。

◆教会の裏手は猫地帯です。五月半ば頃だったと思います。かねて顔見知りのペルシャ系の猫が、いつもブロック塀の上に乗っていました。あまりにいつも乗っているので、よほど気に入ったのだろうと思っていますと、そのうち妙な行動をする事に気が付きました。穴の中に鼻を突っ込んで嗅いでいますが、時々ピクッと顔を引きます。何かが中で動いているようでした。実はその時、小鳥の雛がかえって、小さな鳴き声を出していた訳です。猫は動かない筈です。時には穴をふさいで座っていましたから、親鳥は餌を運ぶのに随分苦労しただろうと思います。

猫のいない時に、鏡と懐中電灯で中を照らして見ましたが、少なくともブロック二枚分（四〇センチ）は何もありません。

▲猫地帯

◆ある朝、けたたましい鳥の声がするので、車庫に出て見ますと、大きな虫をくわえた親鳥があちらこちら飛びまわりながら大声で鳴き続け、猫はブロック塀に飛び上がろうと身構えていました。

◆そこで私は小鳥の巣を守る為に、猫の邪魔をする事を考えました。取り敢えず

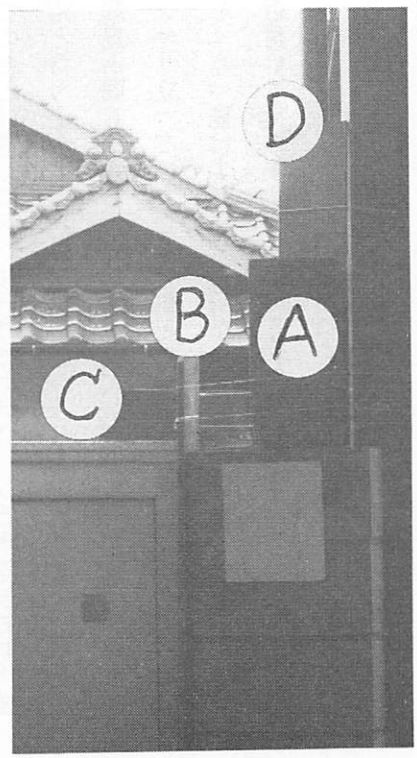
A　ブロックを立てました。猫は習性として、始めて置かれた物には乗らないと思ったからです。しかし執念の猫は、ブロックの半分しかない狭い所に飛び上がりました。そこで、

B　邪魔板を立てました。そしてブロックの上に立てないように板とブロックを縛りました。ところが今度は、幅わずか四センチの扉の上に立って穴を窺うようになりました。そこでその上に立てないように、

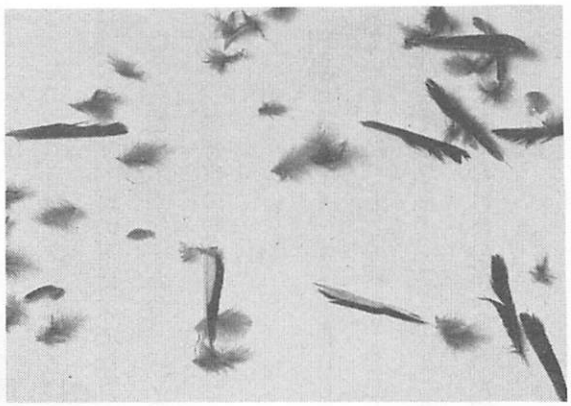
C　三角形の邪魔物を付けました。すると彼はブロックの肩に手を掛けて首だけ出して穴を窺います。これなら手を出せませんから幾らか安全ですが、親鳥は恐ろしくて穴に入れません。そのうちに、立てたブロックの上面に足を乗せ、軽業のような格好で穴を窺うようになりました。そこでブロックの上にも立てないように、ブロックの上に

D　板を立てました。これで一安心と思っていると、六月一二日から一三日にかけて大雨が降り、Cが柔らかくなり、飛び上がった彼の重量に負けて障害物は落ち、猫は再び扉の上に立てるようになったようです。

〔防猫対策〕



◆六月一四日、月曜日の朝の事でした。家内が洗濯をしようと裏に出ますと、見覚えのある鳥の羽が沢山散らばっていました。明らかにやられたのです。すぐ小鳥の巣を見に行きますと、前記の三角形の邪魔板Cが落ちていました。



▲惨　劇

◆斜め裏の家を見ると、庇の上で黒まだらのペルシャがこちらをじっと見ています。この家には少なくとも四匹の猫がいますから、犯人を特定する事は出来ませんが、いつもの彼とは明らかに目付きが違います。彼の言っている事が聞こえて来るようです。

〈ペルシャ〉

一、缶詰も色々あるからおいしいが、動いているものを捕えて食べる味は格別でした。少し悪い事をしたかな??

二、でも、これは猫の本性ですから、仕方がありません。目の前で動くものには、手が自然に出てしまうのです。

三、大体あれはおじさんのうちの鳥だったんですか??

〈わたし〉

そう言われればまあ仕方がないかなあ。

▲容疑者？

◆雛は相当に成長しているらしく、声はかなり遠くまで聞こえます。親が餌を運ばなくなったので、一層大声で鳴いているのかも知れません。猫たちは連れ立って、塀の下に来ては耳をそばだてています。暫く見ていても親鳥が来ないので、パン屑を手で揉んで落として見ましたが、鳴き声の変化はありませんでした。

◆更に暫く見ていましたが親鳥は来ません。ある時期には三分か五分に一度餌を運んで来ていました。もし片親がやられても、もう一方が同じ間隔で餌を運び続けるなら、一〇分ごとに来る筈と思いましたが、或いは二羽ともやられたのか、残った親が危険を感じて巣を見捨てたかでしょう。

◆このあとは書くに忍びないのですが、一つだけ書きます。雛は殆ど育ち上がって、巣立ちが近かったと思われます。ほとんど親鳥と同じくらい大きな雛が巣穴から出て、ブロックの上にボンヤリ立っていました。飢えて、もはやこれまでと思ったのでしょう。猫は少し離れた所から見詰めていましたが、すーっと近付いて行きます。私が、「危ない、逃げろ」と言いますと、パッと飛び立ちましたが、四、五メートル先の道路におりました。猫は瞬時に飛び掛かりました。「あーっ」と思わず叫びましたがどうする事も出来ませんでした。

◆教訓。明らかに小鳥の判断ミスです。適当な営巣地がなかっ

たのでしょうが、安全に対する配慮不足です。深い穴に作ったから、猫の手も鳥の嘴も入らないのはよいとして、そのあと長期間の給餌や、最も危ない巣立ちまでは考えが及ばなかったようです。あるいは、雌雄の一方が、無理に押し切ったのかも知れません。こうして小鳥の家族は惨めな最後を遂げました。最初の判断は大切なものだと思います。

◆それと、冒頭の聖句、ヨナ書の教訓を学びました。口語訳では、「とうごま」と訳されていますが、「一夜にして生じた」その急成長ぶりから、文語訳の「瓢」（「ひさご」＝「ひょうたん」）が適当ではないかと思われます。

以上　一九九三年六月一四日記

イエローカード

（家族会の三等席から）

ぼけろうじん

イエローカードとは何かご存じですか。この頃ブームとなったサッカーJリーグの戦いで、違反を犯した選手に対して、審判員が黄色い板を高く挙げて示す警告のこと。カルタ取りではお手つき、マージャンでいうチョンボのことです。これを二枚貰うと失格となり、その試合から退かなければならない厳しいものです。

さて、このぼけろうじん、前田教会の二年生、しかし家族会では応援団長?、お陰でクリスマス劇では、ありんこ族の王様にしていただいて威張らせていただきましたが、振り返ってみるとイエローカード数知れず、何時もイエス様に叱られ通しです。

● 頑張れといって

あの辛い病気と闘って五年、それにも怯まず、T兄の礼拝でのあの張りのあるお祈りには頭が下がります。つい「頑張って下さい」と声をかけたくなります。ところが、「私が頑張っても仕方ありません、全て神様の御旨に従うだけです、祈って下さい」と逆にたしなめられます。ご免なさい。

イエローカード　第一号　でもねー。

『万事の主はわれらと共におられる』

（詩篇　四六・一一）

● 天国ソロバン

正野さんの名著「神は愛なり」これによって、お母さんは

皆さんの中に今も生きておられます。その中に出て来る「天国ソロバン」。日曜日には仕事を休んで礼拝に出ましょう、その方が儲かりますよと教えられる。でも日曜も知らずに網に入ってくるお魚さん相手の漁師や、昼夜三交替休みなしのかつての砂鉄屋商売では、それは無理な話?。クリスチャンにはなれないのかなーと屁理屈が頭をよぎります。

その時天から声あり、ソロバン迷人よ、つまらんことを考えるな!

『神は愛なり』(一・ヨハネ四・一六)とぴしゃり。

今頃すこし分かりました、エビにも日曜日をやった方が良かったかな!。

● 知らん顔して

年二回の同窓会、集まるのは年はとっても元気のいい奴ばかり。この連中の中で、私一人クリスチャンですと真面目そうな顔をすると座が白ける。イエス様お許しください、『今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう。』(マタイ二六・三四)イエス様の声が聞こえて来る中で、ビールの杯を重ねている間に、いつともなくその声が遠ざかって行く。イエス様すみません。

次の日曜日はその同窓会。楽しみにしていたところが、求道者会でのお説教は、

『あなたがたは、この世と妥協してはならない。』

(ローマ一二・二)とピシャリ。

さあ困ったな!、どうしましょう。

● お祈り

今夜は私の食前感謝のお祈りの番、「いいですか、天のお父様、今晩は……」途端に「何というお祈りをするの…」慌てて「天のお父様、有難う御座います、……」とやりなおし。

お正月に「敬虔の奥義」について、神様を恐れ敬う気持ち、これが敬虔な気持ちです。教会に行ってお話しを聞いて楽しくなり、イエス様を友達のように思ってはいけません、と教えられたばかりなのに。

わかりました、もう一度乳飲み子からやりなおします。

『愛する者たちよ、それだから、この日を待っているあなたがたは、しみもなくきずもなく、安らかな心で、神のみまえに出られるように励みなさい。』(二・ペテロ三・一四)

この聖言で救われた気持ちがします。心と口が一致するよう努めます、どうかお許し下さい。

● 島流し

創世記一二章に、アブラハムは齢七五才にして、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」、という主の御言葉に従ってカナンの地に行ったとあります。

私も五七才の時、主の御命令か？八幡に家と妻を残し、種子島に単身赴任しました。初めは一年位の心算が、その後の赤字続きの為、遂に一三年間にも及び、その間に母を天国に送り、留守を守るババさんには大変な苦労をかけました。そして七〇才となってやっと八幡に帰ることを許されました。

昭和四七年のドルショックはそれほど厳しく私の顔をヒン曲げました。「顔面神経麻痺」、中枢神経まで犯されず中風にならずに済んだことは感謝でした。会社は、砂鉄ではもう飯は食えない、根本的な事業転換（今でいうリストラです）を迫られ、皆で考えた結果、種子島で鰻と車えびの養殖をすることになり、前歴魚屋の私が全責任を負わされることになりました。

生物には、自然には、神様の支配される自然の法則があります。それに気がつかず、それに逆らって、おれがおれが、と頑張りましたが、人間のすることには大きな落し穴がありました。神様のお怒りによって生まれた一三年間に、会社に与えた赤字はとてもイエローカードどころではなく、罪万死に値するものでした。しかし、それは今思うとお恵みの中の感謝の島流しでした。

その様な不始末にもかかわらず、それから一〇年近く経って、今尚それに関連する仕事をさせていただけるとは、大きな主の恵みに感謝する私です。

『神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。』

（一・コリント一〇・一三）

● 投網に囲まれて

『今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられた』（ローマ三・二五）

イエローカード常連のこんな私を、神様はよく皆さんの仲間として導いて下さったものだと、今更のように、主の深いお恵みに感謝するものです。

思えば六〇年前の一八才の時に、私は、主人の伊藤の大将に連れられて釜山教会の門をくぐり、お説教を聞いたことを覚えています。それから魚と一緒に飛び出し逃げかくれしていました。しかし、よく考えて見ると、私をクリスチャンに

する為に若くしてフイリッピンの戦陣に散られた伊藤の大将と奥様、学校の中村先生、田中牧師先生外、ずらりとクリスチャンの先生先輩達が私を取り囲んでおられたことを悟ります。そして遂に、ババさんを通して、イエス様の投げられた榎本先生の網に引っ掛かってしまいました。

そして、一〇年前の小学校の同窓会での偶然の出会い以来、私とババさんの敬愛おく能わざるお姉様になっていただいた神戸の香月さんとの交わりこそ、奇しき主の御業という言葉以外にありません。昨年天に召されて初めて知ったその御経歴、香月さんは、御主人に先立たれてからの五〇年間を主の道一筋に歩かれ、S大学神学部の教授として三四年間も生徒の指導にあたられた方と聞いて、本当にびっくりしました。それなのに常に「私は駄目人間です」と口癖に、またそれに共感してお付合させていただいた私達、穴があったら入りたい位です。イエローカードがいくつあっても足りません。

＊　＊　＊　＊

野村先生しかり、香月さんしかり、「虫けらのような私です」、「駄目人間です」と謙遜される方程、主に愛された人だということを教えていただきました。今尚私は、とても信仰を云々することは出来ませんが、親切に導いて下さる教会の皆さん、家族会の兄弟姉妹に囲まれて、ババさんと共に今が一番幸せです。あまりイエローカードばかり貰って退場ということのないよう、先生のよく言われるように常に初心に帰り、次の聖言にすがり、イエス様にお従いして行きたいものだと願っています。どうか皆さんの温かい御指導をお願いして反省の言葉とします。有難う御座いました。

『今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。』（一・ペテロ二・二）

感　謝

池田　操

今年の新年聖会も三日間、神様の恵みの内に終り、聖言によって霊肉共に励まされ、今年何があっても大丈夫と、確信を持って日々信仰に歩みたいと願っておりました。

恵まれた時程、又試練もあります。微かに頭の片隅を余儀なく走ります。先ず、寒い冬は誰でもそうですが、風邪に気を付けなくてはと思ってはいました。一月の中間に入り、自分の油断から風邪をひいて、「あゝしまった。」と思いましたが後の祭り。熱は思う程上がらず、咳込むばかり、心臓が肥大する事ば

かりを心配しておりました。目まいではなく、頭が「ふわっ」とくる。その一瞬、自分の体に何か変化が起こってると、我に帰ります。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」聖言が与えられました。体力の消耗もありましょうが、尿の出も悪いので安静にして休んでおりました。心は平安です。

榎本先生に電話をして、お祈りをお願いしました。姪が、朝晩脈を計りますが数が減る一方で、近くの主治医先生に、黒崎の年金に行かせて下さいと、お願いしました。さっそく紹介状をもらって、年金の内科へ参りました。

先生も手術と言われましたが、心臓手術も七年目を迎え様としての矢先ですので、私は「手術より不整脈の方を調べて下さい、手術はしません。」と断わりました。

先生は心良く引受けて下さり、入院手続きをして下さいました。一週間目に入院しました。手の震えも少しありましたので、神経内科に掛かり、手を動かしたり、目や足の検査、脳波も取りました。頭に血栓が出来てる様子、多分点滴で流れたのでしょう。お腹のエコー、心臓のエコー、異状なしとの事、一安心です。

「すべての道にて、主を認めよ。」感謝です。

又、CTにも掛かる様にとの事、私にとっては、珍しくて浮き〳〵してました。台の上に体を休めて、トンネルの中に長く入って行く様な錯覚をおこしますが、終って振り返れば、それは短いトンネルです。笑い出しました。異状なし。お薬で調整していましたが、最終的には手術かなーと思ってました。

先生が、「ペースメーカーを左胸に入れましょう」、とおっしゃいました。

榎本先生も寒い中、何度も足を運び祈って下さいました。

『わたしは主である、すべて命ある者の神である。

わたしにできない事があろうか。』（エレミヤ三二・二七）

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神……。」と祈って下さいました。

点滴も始まり、三月一日午後二時、手術室へ運ばれます。心臓手術とは違い、局部麻酔ですので気持も楽です。神様が、ペースメーカーを入れて私を助けて下さいます。

「命ある者の神である、わたしにできない事はない」、と約束して下さっておられるのですから、こんな有り難い事はありません。「神様にお委ねします。」と祈りました。

執刀して下さる先生、看護婦さん達を祝して下さい。

主のみ手の内に手術が行なわれます様にと祈るのみでした。

局部ですから痛みはありますが……、先生が胸に袋を作りそこにペースメーカーを埋め込む様子が、手に取る様に、先生の手の仕草で分りました。痛みの苦しみは、イエス様が十字架に掛けられた苦しみほど、私には与えておられない、神様のご愛だと思います。

無事終り、部屋に帰りましても、左手の肩から肘あたりまでを三日間、絶対に動かさない様注意され、後は起きても良いとの事、まったく痛みもなく、主の守りの内に一夜が明けました。食欲もありますが、塩分五gには、些か閉口しました。高血圧、動脈硬化を予防する為、又、元気で日常生活が出来るのですから、少しでも守るほかありません。

人工ペースメーカーの「しおり」から引用して見ました。ペースメーカーは、ペースセッター社製、ペースメーカーはパルス、ジェネレーター電気刺激発生装置と、電気的な刺激を心臓に伝える為のリード電極とからなる精巧なシステムだそうです。どの部品も最高品質の材料を使って製造されています。有人宇宙船製造と同じタイプの製造工程と装置を用いて、一個一個ペースメーカーは細心の注意を払って製造されてるそうです。又、テレビ、電子レンジ、雷も安心。注意する事は、歯科に掛かる場合とか、無線の或る種のものは時としてペースメーカーの機能を妨害する事があるそうです。脈七〇～一一〇、飽く迄も機械ですので、作動を停止する場合もありましょう。

先日、退院約一ヶ月目に外科外来日。心電図、レントゲンを取りました。メーカーの方も調べて下さいました。

「順調に働いております。良かったですね。」と。しかし、脈が五以上違ったら病院へ行く事と言われました。

主治医先生に、レントゲン写真を見せてもらいました。左胸に、奇麗にペースメーカーが写し出されています。思わず、「まあ」、と声を上げました。ロボットの中を想像して見て下さい、その一部から電線が胸中央右寄りに通されていました。

医学は進歩するとは言え、私にとりましては、神様のなさる業をなさしめていただき、この目で見させていただきました事を心から喜び感謝でいっぱいでございます。

榎本先生、兄弟姉妹方の祈りに支えられ、家族の協力も得て、又皆様にお目に掛かり、主を礼拝する者として幸いな時を与えられ、誠に有り難く、感謝と共に心から御礼を申し上げます。

『主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。』（詩篇一〇六・一）

サイド・ブレーキ

小正路　節　美

◆昨年の二月。丁度妹の結婚式の三―四日前の出来事です。母と私は、もう少しで大変な事故に遭うところでした。が、私達二人は神様に助けていただきました。

父と二人でテレビを見ていた時です。その時、電話が鳴ったので取ってみたら母からでした。母いわく、「仕事が終わったので迎えに来て」との事。

私は普段、一緒には出かけないのですが、父に「お前もおいで！」と言われたので一緒に母を迎えに行きました。

母を車に乗せてから……

（母は大体いつも、助手席に乗るのですが、その時はなぜか隣には乗らず私が代わりに助手席に乗りました。）

父が「今から河内まで水を汲みに行くからね。」と言い、家には戻らず直行で河内まで行きました。でもそれがそもそもの間違いでした。この日の河内は、珍しく、人も車もほとんど居なくて……

父が「いつもは、夜遅くても人が多くて、こんなんじゃないのに…」。

車はいつもの所に止めて、父は水汲みに出かけて行きました。母と私はその間、車の中でずっと話していましたが、母が私に「お父さんの手伝いに行っといで」と言ったので、私は一旦車から降りて父の居る場所へと向かいました。が、余りの寒さで車の方へひき帰したのです。

（その時も又、私は助手席に乗りました。）

私が車に乗りちょっとしてからの事です。車が急にバックしながら動き出したのです。

母はびっくりして大声は出すし、父はあわてて車の方に近づいて来ましたが、道は下り坂……

車はどんどん下へと下がって行きます。丁度その時です。私が、ふと、サイド・ブレーキを見たのは……

サイド・ブレーキは、完全に下まで下がっていました。私はとっさに、サイド・ブレーキを引いたのです。そうしたら、車はピタリと止まりました。ちなみに、私達は車の免許を取っておらず、運転の仕方は全く分かりません。でも、サイド・ブレーキの事は、同じ戸畑教会の知人からいつも言われていたのです。

「車が急に動き出したとしたら、最初に何をするか？
とにかくサイド・ブレーキを上に持ち上げる事。
あわてないで、今自分が何をすべきかを考えて行動する事」
その言葉を思い出して…
私達二人は命びろいをした訳です。

母は、車に関しては知識がないので、もしもあの時、私が父と一緒に母を迎えに行かなかったとしたら…
母に言われたまま、母一人車に残し父の手伝いをしてたら…
そして私が助手席に乗らず、後ろの席にすわっていたとしたら…
教会の知人から、サイド・ブレーキの事を聞いてなく、又自分が、その事を思い出していなかったとしたら…
下から、他の車が来て、人などが居たとしたら…
私達は、大変な事故になり、きっと結婚式どころではなかったと思います。

私は神様や知人に本当に感謝しました。家に帰ってすぐに私は知人に電話をかけ、この事を話しました。
彼はびっくりして…
「たいした事にならなくて本当によかったね。きっと日頃の行いもよかったんだ。それに、神様も見守ってくれたんだね。これを機会に、これからも、お祈りや感謝を忘れないで。」と…

まだまだこれからもどんな事があるのかは、自分でもよくは分かりませんが、たえず信仰をもって、お祈りや感謝を忘れずに、心がけて頑張っていきたいと私は思います。

以上

主に導かれて

高木　ツルヱ

昨年三月頃より主人の体調が悪くなり、産業医大病院で検査の結果、病気再発との事で五月二八日、中間市立病院に入院いたしました。二か月の入院生活も、神様のあわれみと榎本先生を始め皆様方のお祈りにささえられ、七月二〇日感謝のうちに無事退院することができました。
主人の入院中は看病のため、先生にお願いして日曜学校の御用を休ませていただいておりましたが、退院後も主人の発熱や口内炎などで朝夕の食事に時間がかかり、朝八時半からの日曜

学校の出席が無理になってまいりました。私の願いとしては、御用は続けさせていただきたいと、神様の御旨を求めて祈ってまいりました。九月になり、『人の歩みは主によって定められる』（詩篇三七・二三）の聖言が与えられ、今後私の歩む道をはっきりしめしていただきました。そこですべてを主にゆだね、先生のお許しを得て御用をやめさせていただくことになりました。

私のような無きに等しき者が、神様のお導きによりまして日曜学校の教師として選ばれ、失敗の多い者を神様と先生が愛と忍耐をもって導いて下さった故に、今まで尊い御用に加えていただきました。このことを思い、私の心は感謝でいっぱいです。

かえりみますと、昭和三三年当時、主人が日曜学校で小学生（二級）の御用をさせていただいていました。娘のゆりは幼稚科（一級）の伊規須泰子先生のクラスに出席するようになり、私は二級の子供さん達と一しょに聖書を学び、金言に耳をかたむけて恵まれていました。そのうち先生から「二級の助手をして下さい」と言われ、私でも主の御用にあずからせていただけるならと、心から喜んでお受けし、祈りつつ出席をとったり献金の御用などさせていただいておりました。其の後先生方の異動で、主人が中学生のクラスを受け持つ事になり、二級は小野道子さんと私に変わりました。

しかし、直接御用をさせていただくようになりますと、改めて自分の信仰と歩みを神様の前に問われて、純真な子供さんの前に立つことが不安になって不信仰にかこまれた時もありました。そんな時、波風を見て恐れたペテロのように「主よお助け下さい」、とすがる思いで祈り求めますと、主はあわれみのまなざしをもって「わたしがいるから大丈夫だよ」、とねんごろに語って下さり、再び信仰を与えていただきました。

教師会では先生を通し、『御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである』（一・コリント二・一〇）の聖言で、どんな時でも自分の状態を見ないで主を見上げ、御霊に導かれて御用をするようにとはげましていただきました。『娘よ、聞け、かえりみて耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家とを忘れよ。』（詩へん四五・一〇）は、その頃大変恵まれた聖言でした。以来、榎本民子さん、野村仰一さんと共に御用に励んできました。クリスマスや夏季学校など楽しい思い出が一ぱいです。

日曜学校の御用をさせていただいたことにより、私の信仰も整えられ、隠れたところにおいでになって隠れたことを見ておられる神様の前に歩く者と変えていただきました。

長い間私の御用のためお祈り下さいました皆様に心から感謝

いたします。これからは日曜学校の皆さんが、神様の御愛にふれ、聖言によって成長し、イエス様の救いに導かれるようお祈り致します。また御用にあたられる先生方のためにも祈らせていただきます。

平成五年六月初旬

思い出のいと

うえの　米　子

今年のつゆは長雨にて、強い雨もあればよわい雨もあり、六月の花あじさいも大きな花べんを雨に打たれ静かに咲きほこっております。水にうるおうと言うことは、人に水々しさを与え、深くものを思わしめ、自分を振り返ることが出来ます。

雨にぬれた緑の木々、草花、庭石、小砂利、木々の葉より落ちる緑のしづく清らかにして、身が洗われます。

七月に入り、天に召された主人も、まる四年、五回目の記念日を迎えます。時の経過の進むにつれ其の思い出は、糸まりからほぐれ行く糸のように、次から次へとその色を濃くしてほどかれて行きます。病床の折、お器を通していただきました詩篇九一篇一四節から一六節のおことばを愛誦させていただき、祈りを通して主人に触れさせていただき、神様の御愛を感謝申し上げております。

一四節　彼はわたしを愛して離れないゆえに、わたしは彼を助けよう。彼はわが名を知るゆえに、わたしは彼を守る。

一五節　彼がわたしを呼ぶとき、わたしは彼に答える。わたしは彼の悩みのときに、共にいて、彼を救い、彼に光栄を与えよう。

一六節　わたしは長寿をもって彼を満ち足らせ、わが救を彼に示すであろう。

もったいないような神様のおことば、主人そのものを思わせていたゞき、主人はほんとうに恵まれた幸な人でした。故人は太平洋戦争に於て海軍省の報道カメラマンとして、南の大海に、また中支の大地に、空馳けて兵士と共に戦場にありました。終戦後は茨城の里に疎開して体の休養をいたゞいておりました。体に何の損傷もなく家族にかえしていたゞきましたことは、神様の大きな大きな御愛であることを覚え、感謝申し上げて居ります。神様からいたゞいた試練の道は、彼でなければ味わうことの出来ない尊い賜物ではないでしょうか。

主人は、戦後のあの殺伐とした世情の中に、若き人々に愛の

光を注ごうとして、農村の青年達に呼びかけ、音楽を聞く会や映画の観賞会を設けて青年達と交りを持ち、身を以て愛の働きをなさしめていたゞきました。主人は映画作りをしていた人でしたので、自分の出来る身辺のところで奉仕させていたゞきました。最終列車で帰る主人を待ちかねて、彼らは駅まで迎えに出て下さいました。夏休みには学校の校庭を借り、青年達が主催者となり納涼映写会を催したりして、よき交りをさせていたゞき、町の皆様からもよろこばれました。このようなことも、主が心に思いを起こさせてお働き下さいましたことゝ信じ、感謝申し上げて居ります。戦中戦後を通し、さまざまな試練に会いましたが、この試練は天国行きの一歩一歩、主に近づきまつるステップであることを覚えます。又、信仰への忍耐をためされる時でもあると自分に云い聞かせております。

『主は愛する者を訓練し、受けいれるすべての子を、鞭打たれる。』（ヘブル一二・六）とございます。この訓練は、魂の父が私達の益のため、その潔きに預らせるために、そうされるのであり（ヘブル一二・一〇）、試練を通していただく、『しばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光をあふれるばかりに私達に得させるのである』（二・コリント四・一七）。神様は真実であられます。

天に召された主人は、おことば通りすばらしい栄光を神様から賜りました。

細い小さい雨足の音を聞きながら平安を覚えつつ、帰天の主人に思いを馳せ、糸まりからほぐれゆく思い出の糸は尽きそうもありません。どこまでつづくのでしょうか。

流れゆく水に委ねし　笹舟の、
わが身も如かりと主の聖手（みて）にあり。

拙なさをかえりみず、また「ぶどうの木」に寄稿させていたゞきました。主よありがとうございます。御聖名を崇めて感謝致します。

平成五年七月のある日

かんしゃ

畠山英子

『見よわれ新しき事をなさん。やがておこるべし。汝ら知らざるべけんや』（イザヤ四三・一九）

◆主の憐れみと大いなる恵みとそのくすしき御業に感謝いたします。「神様などには絶対に頼らんぞ。人にも絶対に頼らん。ただ自分の力と努力と運だけだ」、と大言を吐いておりました畠山正三が、年七二歳の平成三年七月終りに、食道癌に倒れました。

市立病院の医師から、「三期の癌」と言われて、どうなるか……「遅過ぎましたが、手術をして見ましょう」との事です。「お父さん、今日までやりたい放題、恐ろしいものなし、医者いらずの薬いらず、わが道を行くとやって来たけれど、遂に年貢の納め時が来たわね。そろそろ神様のお恵みを考えたら」、と申しました。割合性格は愉快な人でしたが、

「もうこの年になって、ゆっくりあの世の道に行こうかと思っていたら、とんでもない病気に取り付かれてしまった。ただでは死ねないな」など、それでも病気を否定して、首筋のリンパ腺に出来た癌を蜂が刺したなどと言っておりました。

◆しかし、治療室に入りコバルトで焼いて行くうちに、他の患者同士の話で、自分が食道癌である事を知ってしまい、その日より心の中に動揺が来だし、気難しくなりました。考え込み、自分の力ではどうにも出来ない事が分かり出したのです。私は心の中で主に感謝致しました。私の一つの祈りをお聞き下さったのです。これによって自分の力の無さ、弱いものである事を彼は知りました。

◆天国の河本のおばあちゃんが、私が曽根に来る時に言われました。「畠山家を救いに導く為に英子ちゃんは主より遣わされるのよ」との御言葉でした。

◆毎日が闘病生活に入りました。今は第三年目です。戸畑教会の伊規須先生はじめ、皆様がお祈り下さいまして、生ける神なる主イエス・キリストの御名が崇められ、御栄をあらわされた事が、何よりの主への感謝でした。

◆次の事ですが、私の住んでいます所は、昔は「企救郡田原村」と言いました。今でこそ町一杯の家々ですが、親族、遠縁、知人、昔ながらの農家の方々がガッチリと居を構えた所で、何か一つ変った事がありますと、明日とは言わず、その日のうちに知れわたる所なのです。

その親族、知人一同に取り囲まれて、四〇歳にもなる宏が結婚もしないと評判でしたが、この度、皆さんが言いました。

「畠山さんはキリストを拝んでいるし、いつも日曜日はおまいりに行っている。だから正ちゃん（私の主人の呼び名）も宏ちゃんも幸福になるんだね」と。主に感謝です。

◆五月二三日、披露宴の朝八時より、紀美枝さんは花嫁姿で老人ホームを訪問して、お年寄りの体の不自由な人を慰めました。涙を流して喜ばれている写真を見て心が熱くなりました。

◆後で榎本先生のお宅を三人で訪問致し分かりました事ですが、シルバーサンホームの理事長は榎本先生の古いお友達で、クリスチャンだったのです。日曜日には理事長の奥様が自動車で老人の方を教会へ連れて行ってあげるために、お迎えに来られるそうです。

◆この事を書いています時、市立病院より電話があり、主人はだいぶ癌がよくなっているとの事です。五年間、転移しなかったら完治するらしいのです。今まで神様のおかげという事を口にしなかった人が、この病になってちょくちょく「お恵だなあ」と口に出すようになりました。

◆結婚披露宴での畠山側代表挨拶はどの人にお願いしようかと話していた時、紀美枝さんが横から一番に伊規須先生と言ったのも嬉しい事でした。

◆主人が入院してからある日、長男畠山宏が突然私に申しました。「お母さん、僕は結婚をしようと思うのだけれど、先ずバプテスマを受けなければいけない」と。私は夢のようでした。教会には小さい時から行っていました。今でも戸畑教会には日曜ごとに礼拝に出ています。妹三代子、弟義信は、前田教会で榎本先生より洗礼を授かっていますが、長男宏には全くその様子はなかったのです。そして年は三九歳にもなっています。私は心の中で神様に大声をあげて感謝致しました。

早速、伊規須先生へ報告！宏が自ら先生にお願い致すのを待ち、個人伝道をいただきました。戸畑教会の皆様はわが事のように喜んでくださいました。河内で六月一日、戸畑教会の方々と、祝福のうちに伊規須先生によってバプテスマを受け、イエス様の子供としての一歩を踏み出し、水から上がって記念写真を撮った時、花束を持った宏の顔はまだ見た事もない柔和な喜びの顔でした。思わず感謝を致しました。あともう一人、大物、畠山正三が残っております。この人の為に祈ります。

◆この次は宏の婚礼の事です。先生は（結婚式場となる教会堂の）絨毯まで揃えられた事を、皆様から聞きました。結婚相手は、小倉大手町にあるシルバーサンホームと言う特殊老人ホームの保母さんをしている、岡野紀美枝さんです。私は会って見て、よくこんな若い人がお年寄りのお世話をされると、感心致しました。教会の礼拝に宏が連れて出席、皆様に紹介を致しました。宏が紀美枝さんを病院に連れて行きますと、主人は病気

である事も忘れて喜び、気持は明るく一度に治ったような変わりようでした。彼女は老人ホームに勤めているせいか、非常に主人を労り、毎日勤めからの帰りに寄ってあげて慰めている様子でした。

◆この結婚の事がまだ分らない時に、私は榎本先生を訪問させていただき、申し上げました。「先生、宏は当年三九歳、四〇歳になろうと言うのに、全く結婚を致しません。全部お話に反対を致します。もう私共も六八歳を取ってしまい、どうする事も出来ません。お祈りして下さい」。「慌てなくても、結婚しなくてもよろしい。主イエス様にお任せしなさい。全部ご存知ですよ。一番良い事をなさって下さいます。安心していなさい」と、百合子先生と御二人でおっしゃって下さいました。先生は全く主に委ねられるお顔でした。

そして宏の為に祈って下さったのです。

◆榎本先生にお話をして間もなくです。この宏に、神は洗礼と結婚相手を同時に与えて下さいました。私は長年この畠山家に、神を信じ主キリストを仰ぐお嫁さんを与えて下さいと、商売の途中でも、朝に夕に祈っておりました。婚約式も祝福のうちに授けて下さいました。岡野家も全員喜んで戸畑教会へ来ていただきました。

◆結婚式は五月二二日土曜日で、日曜の昼からが披露宴としなければなりません。二日続きますのに榎本先生も結婚式に八幡からお出で下さり、河本夫妻もお忙しいのに結婚式にも披露宴にも出席下さり、戸畑教会の皆様、久保田御主人はカメラマンとして腕を奮っていただき、喜びと感謝にたえませんでした。五月二三日の披露宴は、本当に神の祝福のうちに、みな出席された岡野家、畠山家、親族一同、楽しい楽しい披露宴だったと喜ばれましたが、私にとって何より嬉しかった事は、メーンテーブルに伊規須先生御夫妻、河本御夫妻、久保田御主人、野村先生奥様が出席された事でした。私が曽根の地に参り、ただ私の小さい時からの魂の先生でいられる榎本先生が披露宴に出席されなかった事は寂しかったのですが、日曜の御用がおありでしたので出来ませんでした。私は改めて主イエス・キリストの不思議な御業と、神のくすしき摂理に深く感謝致しました。戸畑教会の皆様、兄弟姉妹に感謝致します。

神が紀美枝さんをこのクリスチャンのシルバーサンホームより選ばれた事も感謝でした。

『事をおこなうエホバ、事をなしてこれをとぐるエホバ、その名をエホバと名のるものかく言う。汝われに呼び求めよ、われ汝に応えん。また汝が知らざる大いなる事と、かくれたる事とを汝に示さん』（エレミヤ三三・二―三）

主の御名を崇め奉り感謝致します。

以　上

道

光成清子

二五年前、大阪から西脇へ落着きました。主人が会社に近い様にと、教会が何処にあるかも知らず、また土地事情も調べずに、隣町の山を開いた段々の景色が良い分譲地に家を建てました。落着きますと教会に行き度くなりました。祈り願っていましたが隣町よりございません。でも探して漸々行ける様になりまして一年目の七月、梅雨で六月から降り続いている雨で地盤もゆるんでいる処に、何の基礎工事もして居りません、石を積み重ねただけの石垣が、集中豪雨のため上の山の広場に貯った水と共に、一気に家の下段の空地まで流れてしまいました。朝、「オーイ」と言う主人の大声に何事かと声の方を見ますと、今迄の外の眺めが違う様です。見通しが良くなっています。外に出て見ますと、家の窓下一メートル先から庭木もろとも崩れ落ちているではありませんか。声も出ませんでした。その上、それからも毎日雨がしとしとと降り続き工事も出来ません。夜中にぼろぼろと土の崩れ落ちる音で身の細る思いでした。

土地の事も信仰の方もまったくの無知な者でした。夜中に起き出し、全然信仰を持っていません主人でしたが二人で祈りました。祈ると言うより、言葉に表わせないうめき、とローマ書八・二六にありますが、まさにうめきより他に出ませんでした。それなのに神様は答えて下さいまして、雨を一時でも止ませて下さいました。その間に眠りをとるという日が一週間続き、ようやく雨も止み工事に掛っていただきました。その間の長かった事。当時私の家が一軒だけでしたが、周囲の土地の石垣も全部やり直す事になりました。

そのついでに、上段の土地の人が道路を私の家の上で行き止まりにし、その道路をはさんだ両側の地主で半分に分けて宅地として整地するとの報告をうけました。

住宅会社に全てを任せて安心して居りまして、その道が私道である事も全然知りませんでした。今迄その道を通り山を横切って教会へ行けば近道でした。西脇の北端と南端に位置して便利の悪い処でした。教会も一つでその頃は歩くより仕方がございませんでした。道がなくなれば山の裾を大廻りして一時間以上かかります。

何とか道を残して欲しいとの願いから、歩きながら、家事をしながらも念仏を唱える様に、道を何卒残して下さいと祈り続けました。それまであの様に祈った事はございませんでした。

工事はどんどん進み、道も塞がれ一メートル位盛り土されて来ました。今迄犬の散歩をさせながら朝夕山の上で祈る事にし

て居ましたが、二ヶ月目には行かれなくなり、其の日は、犬は上って行きましたが、私は門の側で祈る事にしました。

今迄は「神様道を残して下さい」の一点張りでしたが、其の日口から出た言葉は以外にも、「神様、今迄私は自分のためばかり祈って来ました。でも何卒この周囲の方々の良い様に神様の御旨をなして下さい」と祈っていました。その時、目をつぶっている体に前から大きな盾がかぶさって来た様に、はっきり幻を見ました。そうしますと今迄の道を残して下さいとの言葉が全々出なくなり、とっても安らかな気持になりました。ブツブツ云っていました祈りも、うその様に消えて出なくなりました。

然し工事はどんどん進み盛り土も二メートル位になりましたが、何故か心はとても安らかでした。それから一ヶ月、現場の監督さんに会いました時、「あの道を半分づゝ分ける筈でしたが、地主が道をどうしても売らないという事なので道は残す事に成りました」。その時の嬉しさ、心の中で神様本当にありがとうございました。帰りましてから熱い涙がこみ上げて来まして、何度も神様ありがとうございました。〈〈

神様は生きていらっしゃるんだ。この様に何も分らない者をも愛していて下さるんだ。トマスの様に見なければ信じられない私に神様を見せて下さった。

それ迄は天の遙か彼方の存在でした神様が、心の中に、側に何時も共にいて下さる。それまでは遠い神様に向って天のお父様と祈っていましたが、それからは愛する天のお父様と言える様になりました。信仰の盾を手にとるという事も分らせて下さいました。（エペソ六・一六）

お聖書を読む様になりました。それ迄は教会だけのお聖書でしたが…

〝わたしは道であり、眞理であり、命である。〟

道を通して眞理を分らせて下さり、命の道へと導いて下さいました。それから二五年、どの様な時も一緒に居て下さいます。

『わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身を捧げられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。』（ガラテヤ二・二〇）

然も、今迄望んでいましたすばらしい前田教会に導いて下さったあふれるお恵み、何と感謝して良いか言葉もございません。

今年の標語の聖言で、今一度あの体験を思い出しまして、拙ないながら書かせていただきました。

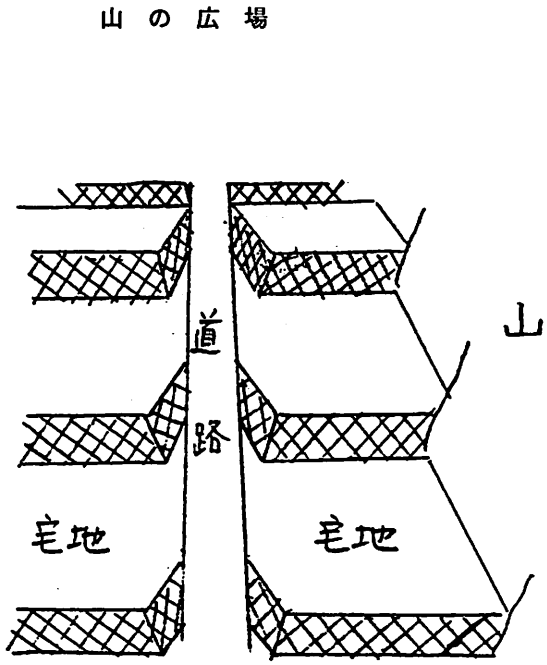
『見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。わたしにできない事があろうか。』（エレミヤ三二・二七）

『わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。』（エレミヤ三三・三）

後書

西脇で二三年間通らせて下さったあの道の上に、私が八幡に来ます半年前に、細長いモダンな二階建の家が建ちました。その頃は自動車に乗せていただいて居ました。

ハレルヤ



みやまきりしま

伊規須　泰子

※イエス様〜〜〜
六月に登った平治岳のみやまきりしまは
とても綺麗でしたよ。
緑の葉っぱがチラチラ輝いて
山全体がピンクに広がって
胸とどろくような美しさでしたよ。
※イエス様〜〜〜
登っていたら途中から
雨が降りそそいで、空はどんより
遙かに見えていた久住連山も
もやで霞んでしまいました。
※イエス様〜〜〜
でもこの自然の美しさを
さんびせずにはおられませんでしたよ。
雨に濡れた山も輝いて綺麗でした。
※フッと聖言が浮かんで来ました。
「山は移り、丘は動いても

わがいつくしみはあなたからはなれることなく
平安を与えるわが契約は動くことがない」と
※イエス様〜〜〜
主を賛美せずにはおられませんでした。
楽しい一日でした。
有り難うイエス様！

感　謝

緒方昌隆

私は、福山通運（株）鳥栖支店から甘木営業所に転勤させられました。同僚と別れるので行きたくなかったのですが、鳥栖支店におれば、「アゴの緒方」が有名でしたので、天のおとうさまに感謝していましたし、六年も福山定期便を走っていました。本社では「吉本興行のタコちゃん」と呼ばれておりましたが、しかし今は過去です。人間の人生は、上から下まで有り、会社でスターだった私も落ち目です。やはり、三〇年以上も夜間にトラックで運転しているせいか、目が悪くなりました。私は、業務員のホームの仕事になりたいと思いましたが、長年してきた仕事を辞められずに迷っておりました。そこで、伊規須先生と神様に相談してから決めることにしました。しかし、自分の思いは本当に色々です。それにつけてもあっさりと所長が承諾したのが不気味でしたが、班長達が「宮崎定期便に乗ってくれ」と頼んだので行くようになりました。結果的には良いのか悪いのか分かりませんが、一応乗る事になり、休みもせずに頑張って現在勤務中。慣れない二日運行の仕事は、はっきり言ってきついです。

でも、私には秋田犬のカナ（六六番は私の一番好きな賛美歌です）が、一〇月七日に六匹もの可愛い子犬を生んでくれたので、きついながらも頑張って仕事に出掛けています。残念ながら一匹は死産でした。自分の子供さえ、遠方に仕事へ行ってて感動が薄かったのに、カナに次々と陣痛が来る度に、ムゾーテ（かわいそうで）たまりませんでした。しかし、カナが余りにも細く痩せてしまったので、私は引退させようとも思っています。カナは私に似て、とても甘えんぼうでしたので、母親役が出来るか心配でしたが、これが意外な程に面倒をみます。子犬の名前は家内に任せました。自分が一番良い子犬だと思う犬をいつも膝の上であやしたりするので、家内から怒られます。その犬は、祈って名づけた「真起姫号」です。

カナは生後三ヶ月頃に我家に来ました。とても体が弱く、獣

医から生きるか死ぬかの境だから（勝負しようと言う事で）獣医が注射を打ちましたら、元気になりました。それから、病院に家内と一緒に通いまして可愛がりました。天のおとうさまから貰った名前が「カナ」ですから、神様が助けてくれたのだと思います。そのカナの子供ですから「まきひめごう（牝）」に期待しています。幼稚犬組（生後三ヶ月以上六ヶ月未満）に、来春出陳したいと祈っています。

カナダからの感謝

鈴木和子

本当に長い間の御無沙汰をおゆるし下さい。

〈私の体のこと〉

◆実は昨年（一九九二年）の一一月に胆のうの摘出手術を致しまして、この二年間続いた激しい痛みから解放されました。けれど、年齢のせいか、大した手術でもないのに、何だか疲れやすくてペンを持つのもおっくうで、暇さえあれば眠っていたい有様で、今日に至ってしまいました。

この胆のうの手術も、「した方がよい」と言う人も、「絶対しては駄目」と言う人もいて、私もどちらにしたらよいのか心は大きく揺れて、最後には、「痛みの発作がおきた時には、痛み止めの薬を飲みながら押さえて、手術はしない」、と決心したのですが、専門医が言うには、「あなたは、二年前に膵臓炎を患っており、胆のうの中の石は、三個とか五個とか数えられるような石ではなく、砂のような細かい石がびっしりと詰まっていて、それが細い管を伝わって時々、膵臓の中に入り込んでしまう」とのことで、「もし次に、もう一度膵臓炎をおこしたら、多分命は助からないでしょう」、という意見でした。

それで、一度はキャンセルしてしまった手術を、仕方なく承諾して、二〜三日後に入院したのでした。おかげさまで、この二年間しょっちゅう起こしていた痛みの発作から解放され、その他にも色々悪い所だらけですけれど、神様の憐れみによって生かされ、毎日感謝しつつ過ごしています。

又、入院に際しては、姉が何から何まで面倒を見てくれて、私は本当に大船にのった気分でした。つくづく姉妹の有りがた味を知った時でした。これからは、いっそう姉を大切に思っていこうと思っています。

〈私たちの近況〉

◆カナダは日本と違って、年がら年中不景気で、最近は失業率

が一二パーセントくらいにもなり、失業者が町に溢れ、いいニュースは何も聞かれませんが、通成と私の会社はレイ・オフもなく、カナダ人でさえ本当に多くの人達が失業して不安な中で生活しているのに、これはもう全く奇跡としか言いようがなく、つくづく私達は神様の憐れみの中に生かされているなと思います。

特に私の会社は本当に忙しく、（九二年の）クリスマスとニューイヤーの休暇がおわったあとから、毎日々々のオーバータイムで、月曜日から木曜日まで、朝の八時半から夜の九時半まで働いて、又お正月から今まで、土曜日もほとんど出勤で、まるで私は家には眠りに帰るだけのような毎日です。

通成が、私が手術したあとからは、大変よく私を助けてくれます。本当にこの忙しさの中、通成の協力がなかったら、とてもやっていけないところでした。

こういう毎日で、帰宅したら、主一の翌日のお弁当の用意をして（通成と私の分は通成が作ってくれます）、台所のあと片付け（通成がしていてくれますが、私の目から見て完全でなく気に入らないので）の仕上げをして、シャワーをしてホッと一息ついたら、もう夜中の一二時で、一二時にベットに入れたら早いほう、大体一二時半くらいにベットに入ってバタンキューの毎日です。

こんな状態で本当にいつも心にかかりながら、皆様にお便りをする気力がなくて、日曜日も礼拝に出席したあとは、一日中ひたすら休養を取ることに専念するばかりです。こんなことでイースターカードも、イースターのホリデーに入って、やっと書いた状態で本当に申しわけありません。

〈新しい住居のこと〉

◆お知らせが遅くなってしまいましたが、昨年の三月末、それまで住んでいたエトビコークの地域から、今のところに引っ越して参りました。前の所からハイウェーで一五分ほど、姉の住むダウンタウントロントから西へ、やはりハイウェーで三〇分ほどのミシサウガ市です。

親しい方から、「家でもコンドミニアムでも、買うときは二〇ヶ所は見てまわるのですよ」、と言われていたのに、私達は一九九一年の一一月に今のところを見に来て、そのまま契約してしまいました。今から考えるとゾッとしますけれど、やはりこれも神様から守られたと本当に感謝しています。

と言いますのは、私達の住んでいるコンドミニアムは、ミシサウガ市の本当にど真ん中で、ビルのまわりはシティホール（市役所）、ＹＭＣＡ、図書館、広大なパーキングロットを持つ大ショッピングセンター、ホテル、バスターミナル（数年後にはトロントからここまで地下鉄も開通します）、大きな会社の

入るビルの数々と、それにありとあらゆる有名なレストランなどが近くに沢山あり――と言っても私達が行くことは滅多にありませんが、何となく心楽しいではありませんか――又シティシャトルバス（無料の）が、この一帯に運行されていて、私達のビルのすぐ前に普通のバスストップも、シャトルバスのストップもあって、このミシサウガ市で、これ以上便利なところは考えられないのです。

そして私達のコンドミの施設も、テニスコート、室内のラケットボールのコート、スクワッシュコート、ビリヤードルーム、エキササイズルーム、プール、ワールプール、サウナ、パーティルーム、ゲストルーム等々があり、二四時間のセキュリティシステム、各戸の中には、ファイヤアラームやオフィスからの連絡などを受ける設備などすべて整っており、私達と主一の部屋それぞれにトイレ、バス、洗面所があり、私達のルームにはシャワールームもあって、冷暖房完備、本当に快適な住居です。こう書きますと、何だかすごい大金持の人々しか入居出来ないみたいですが、さにあらずで、当地ではコンドミニアムなら、大抵のところが、このくらいの設備があって当たり前なのです。ただ台所が私にとって少々狭いのが不満ですけど、このくらいのことは仕方ないと思っています。

私達はこのビルの二二階に住んでいますが、主一の部屋とベランダからは、よく晴れた日にはオンタリオ湖や、姉の家族の住むダウンタウントロントや、CNタワー（世界一高いと言われていましたが、現在はどうでしょうか？）、スカイドーム（全天候型、これと同じものが福岡に出来つつあると聞きました）などがよく見えます。それに夕日が地平線の彼方に沈むのが、台所やサンルーム、主一のピアノ室から見ることが出来、私の楽しみのひとつです。

私と通成は前に住んでいたアパートメントが気に入っていて、環境も申し分なかったし、便利さもこちらほどではないにしても、悪くなかったので、動く気にはならなかったのですが、本当に不思議なことです。セーター一枚買うにしても、五～六ヶ所は見てまわるのに、私達の住居を決めるのに、一ヶ所だけですませてしまって、大して不満もないなんて、本当によく守られたと、唯々感謝しています。神さまは、私達の無知を不完全をこのようにして補って下さるのですね。

〈長男、主一のこと〉

◆早いもので、渡加して今年は一八年、残念なことに、恥しいことに、通成と私の英語はちっとも上達しませんけれど、感謝なことに主一が健やかに育ってくれて、親思いのやさしい子で、いつか送っていただいたカードの聖句にありましたように、

「育ててくださるのは神様です」と言うみことばをかみしめています。最近の目をおおいたくなるような、若者の無軌道ぶりを目の当たりにしますと、その思いはひとしおです。

本当に、私達は中年になってから、五歳の主一をつれて、英語もろくに話せない、カナダ人が何か言っても何を言っているのか全く聞きとれないような情けない状態でカナダに来て、毎日の生活に必死で、主一の勉強もろくに見てやったこともありませんが、本当に神様が主一を守り育てて下さって、今日まで来ることが出来ました。

今年は、毎年二月に行われる大きなピアノのコンクールで、主一はロマンチックコンポーザーの部でシューマンのシンフォニックエチュードを弾き、第一位になることが出来ました。今まで二位とか三位は珍しくありませんでしたが、一位入賞ははじめてのことで、審査員の方からシューマンをこのように深く理解して演奏するのを聞くのははじめて、と激賞された由でした。私達は忙しくて一緒に行くことも出来ず、放ったらかしでしたが、自分一人で、大雪のマイナス一五度Cの中を出かけていって、よく頑張ってくれました。そのおかげでスカラーシップもいただくことが出来、本当に感謝です。以上、大体私達の近況です。

毎日、みんなが忙しくて大変ですけど、主の恵みのうちにいますから、他事ながらどうか御安心下さい。主一は四月の末から五月に教会のリサイタル、九月に大学のリサイタルがあります。

〈姉の家族〉

◆姉の家族も一同元気です。ハンナは、一年間トロント大学を休学してケベックの大学へフランス語の勉強に行っていましたが、この九月から又トロント大学に戻る予定です。

サムエルはホッケーの名選手、そして毎週日曜日には義兄の教会で、日曜学校の教師とヴァィオリンの演奏の奉仕をしています。

ハンナもサムエルも、それぞれに性格は違いますが、よい子達です。主一が言うのには、サムエルは将来きっとビッグなビジネスマンになるに違いないと言っています。

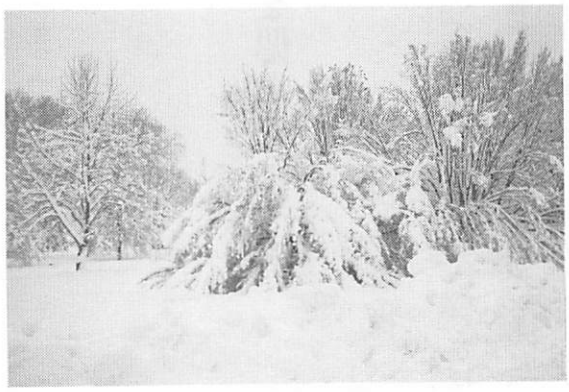
皆様の教会のある地域の方々の多くが救われますように、どうか伝道にお励み下さい。神様のお助けを心からお祈り申し上げます。日本は今年は暖冬だったと聞きましたが、カナダはその反対で、毎日々々マイナス一〇度からマイナス二〇度Cの日が三月までつづき、それに大雪つづきで、本当に大変な冬でした。

〈亡母の墓地〉

◆母の墓地を親子三人で訪れましたら、墓石が雪の下になって、一面雪の原でどこがどこやら分からず帰ったこともありました。この時撮った写真一枚を同封します。雪の重みで沢山の木の枝が折れていました。四月も一〇日だと言うのに、まだ〇度C前後の日がつづいています。

くだらないことばかり、ながながと書いてしまいました。どうか乱筆、乱文、おゆるし下さい。皆様の上に神様の御祝福をお祈り申し上げます。

（カナダ、ミシサウガ市にて、一九九三年四月一〇日、記）



◆（深い雪景色）亡き母の墓地です。深い雪の重みで沢山の木の枝が折れています。

《追伸》（一九九三年五月一〇日、記）

今年の冬は本当にながく、四月いっぱいは、毎朝〇度Cくらいの気温がつづき、例年ですと、母の墓地には白菊の鉢植えを、そして家では母の遺影に白百合の本鉢植えを添えるのですが、今年はあまりさむくて、菊の花がいくらつよいと言っても、あまりさむい目にあわせるのはかわいそうで、家で白百合だけを飾りました。こちらでは、白百合をイースタリリーといって、この季節になりますと花屋さんだけでなく、スーパーマーケットや個人の食料品店なんかでもユリの花であふれます。

五月に入ってどうにか春らしくなり、木々の新芽がボツボツと出てきて、やっとながい冬にも別れを告げたといったところです。（といっても、五月でも六月でも、急にまた冷えこんで、ふるえあがるような日もあります）

《写真説明》

◆大（主一君がタキシードを着ているもの）

一九九〇年のクリスマス

大学のコンサートが終った直後、タキシード姿の主一君と共に

◆小（和子姉がネックレスをされているもの）

一九九一年秋

王立音楽院、ピアノ科を二番で卒業。

〈註〉

鈴木通成・和子兄姉の住所は左記のとおりです。

Mr. & Mrs. Suzuki

400 Webb Drive Suite 2208

Mississauga, Ontario L5B 3Z7

CANADA

正野サカヱ姉を偲んで

池田　操

正野サカヱ姉は、私には近くて遠き人なり、と思い込んでおりました。でも、一回目の心臓手術の時に、正野真宏さんに、榎本先生の説教プリントや、自分の証を書いたプリントを届けていただきました。

平成三年と思います。お正月の新年聖会だったと思いますが、昼食後、私と一緒にベンチで隣り合わせに座っておりました。おばあちゃんは、眠ってる様子でもなく、頭を垂れておられました。午後の聖会には時間があります。「おばあちゃん、お茶を飲みませんか。」と、声を掛けました。

おばあちゃんは、「うん、お茶飲む。」と言われますので、二人で飲む事にしました。「あゝおいしい」と言われ、その顔がまるで幼子の様にニコニコしておられました。

「幼子のようにならなければ、天国に入ることはできない。」みことばを思い出しました。主に委ねられた柔和な笑顔、神様に愛されてる晩年のお姿を忘れる事が出来ません。

この度の証を読ませていただき、信仰の歩みについて教えられます。苦労をなさり、主を望み、信仰を持って子供さん達を育てながら、主の祝福を受けられて行く行程が、はっきりと息子さんによって書かれています。涙を流し、笑いも出てきて、楽しみながら読んでおります。

『勤勉な人の計画は、ついにその人を豊かにする。』

（箴言　二一・五）

第一回目の入院中

E・R・

＊点滴や七五年の大掃除　（一〇月一四日）

肺炎のため抗生物質の点滴、毎日五本づゝ、抗生物質が全身にゆきわたり、慢性中耳炎も乾いた、肺炎を治療するには適切な手段だと思う。

然しマイペットを使い過ぎた掃除で、白木の肌が荒れ変色した様に、消化力も体力も随分消耗して、病前の状態に回復するのは無理の様だ。

＊T・Vなき、静けき日本の広さかな。（一〇月八日）

＊T・Vなき、静けき日の長さかな。

倒れて熱にうかされ、病室で夢うつゝの日々、読まず、聞かず、主とのお交りだけ、素晴らしい、気がついて見るとT・Vの音の無い静けさって、こんなに素晴らしかったのか？T・V公害、此処まで来てしまったか！

＊高熱後の病院食

「お早よう、今日はいゝ天気だから皆んな食べてしまうぞー」
「あー、おいしい味噌汁」。一口、口に入れたが、実は出してしまった。揚げとキャベツ、美味しいのだが！高熱で口の中が荒れて義歯がガタ〳〵で噛めない。
「あゝ歯さえ丈夫だったら、モリ〳〵食べて、お替りしたのに。」
「僕は卸し大根だから柔かいよ！」と美味しそう、卸し大根が呼んで居る。
「そうだ、これなら歯が無くても食べられる」
一口！「パック！」
モザ〳〵口中セロファンが一パイ……ペッペッペ、吐き出した。
家の鰹節は直ぐ粉々に成るのに、きっと粉の鰹節をセロファンにくっつけたのだ！
ちがうよ〳〵、上手に削ると、あんなに粉に成らないんだよ。
あとに小梅二粒、小皿の上から、だまって、おいで、おいでしている。
やっと今朝のごはんも終った。あゝ疲れた。

＊足音に耳澄ます夕餉かな。
回復期に成ると食事が待遠しく成る。

＊口よ、なぜお前はパクパク、こんな御馳走食べないのか？
ちがうよ！ちがうよ！僕もおいしい御飯を一パイ食べたいんだよ
そんなら早く食べろよ！
だって体温が三七度六分にも上って、だるくて、だるくて動けないよ、此の上入れたら全部お返しだ。
そんなら皆で力を合わせて、熱を一度でも二度でも引き降すことだ！さあ頑張れ！

＊聖霊のかたじけなさや聖声きき
今日も目覚めぬ夢幻の国

＊コン・コン・ケン、三連発の咳苦し

＊熱下がり、点滴数え　今日の我
篤き祈りに胸燃ゆるなり

○高熱の苦しさ語る我が子等の

篤き祈りに今日を迎えぬ

＊ゴキブリ、お前も師走か病室の壁

＊昼食と聞いて肩おとす病人かな

＊真夜中だ、咳よ寝て呉れ、おれねむい

＊窓辺飛ぶ鳥大きく日は沈む

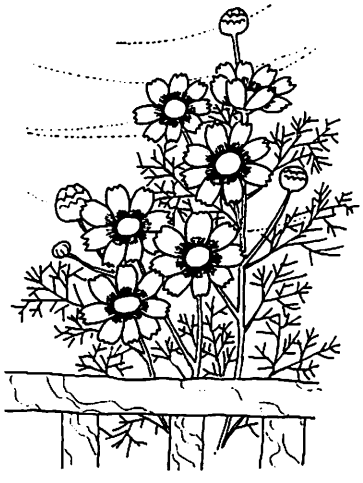
夕焼の残るうす明りを一羽の鳥が窓辺近くをかすめて巣のある森へ飛び去った。秋の日つるべ落しに沈んで行く

＊窓越しに白雪しげく舞い居れば
われも飛ばんと心はずむよ

敬老の日

＊夕餉終れば九時過ぎる
老いの一日早や暮れぬ

＊老妻の炊事場に立つ甲斐〳〵しさ
今日も終りて主をほめたゝう



編集後記

。「ぶどうの木」第二〇号をお届けします。

。今回もたくさんの投稿を感謝致します。

。改めて、主が多くの恵みをもって、私たちに臨んで下さっていることを教えられます。

（N）

発　行　一九九三年十一月

発行者　北九州市八幡東区前田一－一〇－三
基督伝道隊八幡前田教会
牧師　榎本利三郎

発行所　基督伝道隊
八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

印刷製本　有限会社　秀文社印刷